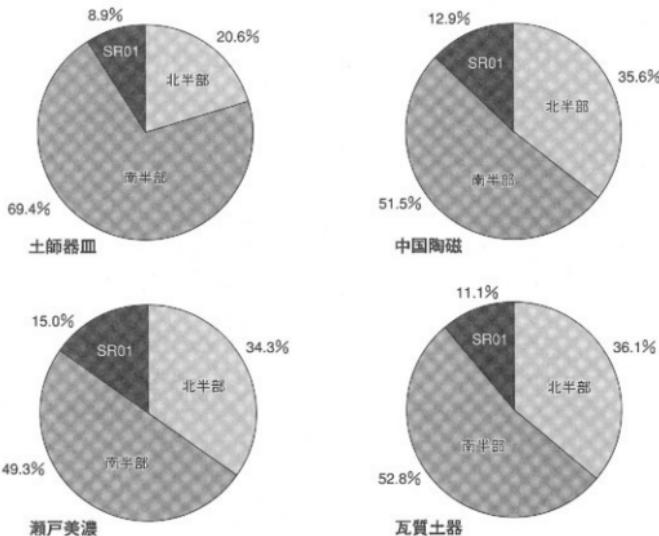


第7図 道場I遺跡A地区出土の土器・陶磁器組成表(1)



		北半部	南半部	SR01	不明	合計
1	土師器皿	1327	4478	575	72	6452
		20.6%	69.4%	8.9%	1.1%	100.0%
2	珠洲捕鉢	547	866	142	23	1578
		34.7%	54.9%	9.0%	1.5%	100.0%
3	珠洲壺	737	1017	267	37	2058
		35.8%	49.4%	13.0%	1.8%	100.0%
4	珠洲壺	160	124	72	7	363
		44.1%	34.2%	19.8%	1.9%	100.0%
5	八尾壺	868	1179	557	33	2637
		32.9%	44.7%	21.1%	1.3%	100.0%
6	八尾擂鉢	28	73	16	0	117
		23.9%	62.4%	13.7%	0.0%	100.0%
7	八尾壺	20	14	9	2	45
		44.4%	31.1%	20.0%	4.4%	100.0%
8	中国陶磁	58	84	21	0	163
		35.6%	51.5%	12.9%	0.0%	100.0%
9	瀬戸美濃	98	141	43	4	286
		34.3%	49.3%	15.0%	1.4%	100.0%
10	瓦質土器	13	19	4	0	36
		36.1%	52.8%	11.1%	0.0%	100.0%
11	土師質土器	1	1	1	0	3
		33.3%	33.3%	33.3%	0.0%	100.0%
12	山茶碗	11	4	1	0	16
		68.8%	25.0%	6.3%	0.0%	100.0%
	合計	3868	8000	1708	178	13754

第8図 道場I遺跡A地区出土の土器・陶磁器組成表(2)

を作成した。同時に報告書記載の実測図のあるものについては、あわせてその番号をドットの横に表示した。また出土地点が離れていても接合する資料については、相互を直線で結んで関係を明示し、その範囲の広がりを図示した。それ以外の遺物、すなわち土師器皿、珠洲、八尾については出土量も多いことから、調査地内に設定した国土座標軸をもととした地区割り（X 軸、Y 軸）を利用し、4 m 每のメッシュ内での破片数をカウントした。カウントの結果示された数量は●の大小で表示し、出土の粗密を表現した。さらに珠洲、八尾についてはこれに加えて器種ごと（壺・甕・捕鉢）の数量分布と組成比率を細分して明示した。以下にこれらの分析結果について簡単にまとめておく。

**土器・陶磁器の組成比率**：まず A 地区での土器・陶磁器の組成比率を示しておく。カウントした破片総数は13,754点である。このうち土師器皿6,452点（46.9%）、珠洲3,999点（29.1%）、八尾2,799点（20.4%）、中国陶磁163点（1.2%）、瀬戸美濃施釉陶器286点（2.1%）、瓦器・瓦質土器36点（0.3%）、土師質土器3点（0.1%未満）、山茶碗16点（0.1%）となる。これらの資料をもとに分析を進める。

各焼物別の単純組成では、北半部：総数3,868点。このうち土師器皿1,327点（34.4%）、珠洲1,440点（37.4%）、八尾916点（23.7%）、中国陶磁58点（1.5%）、瀬戸美濃98点（2.5%）、瓦質土器13点（0.3%）、土師質土器1点（0.1%未満）、山茶碗11点（0.3%）、南半部：総数8,000点。このうち土師器皿4,476点（56.0%）、珠洲2,007点（25.1%）、八尾1,266点（15.8%）、中国陶磁84点（1.1%）、瀬戸美濃141点（1.8%）、瓦質土器19点（0.2%）、土師質土器1点（0.1%未満）、山茶碗4点（0.1%未満）、旧河道 SR01：総数1,708点。このうち土師器皿575点（33.7%）、珠洲481点（28.2%）、八尾582点（34.1%）、中国陶磁21点（1.2%）、瀬戸美濃43点（2.5%）、瓦質土器4点（0.2%）、土師質土器1点（0.1%未満）、山茶碗1点（0.1%未満）となる。

統いて各焼物別の器種組成や出土傾向についてまとめておく。

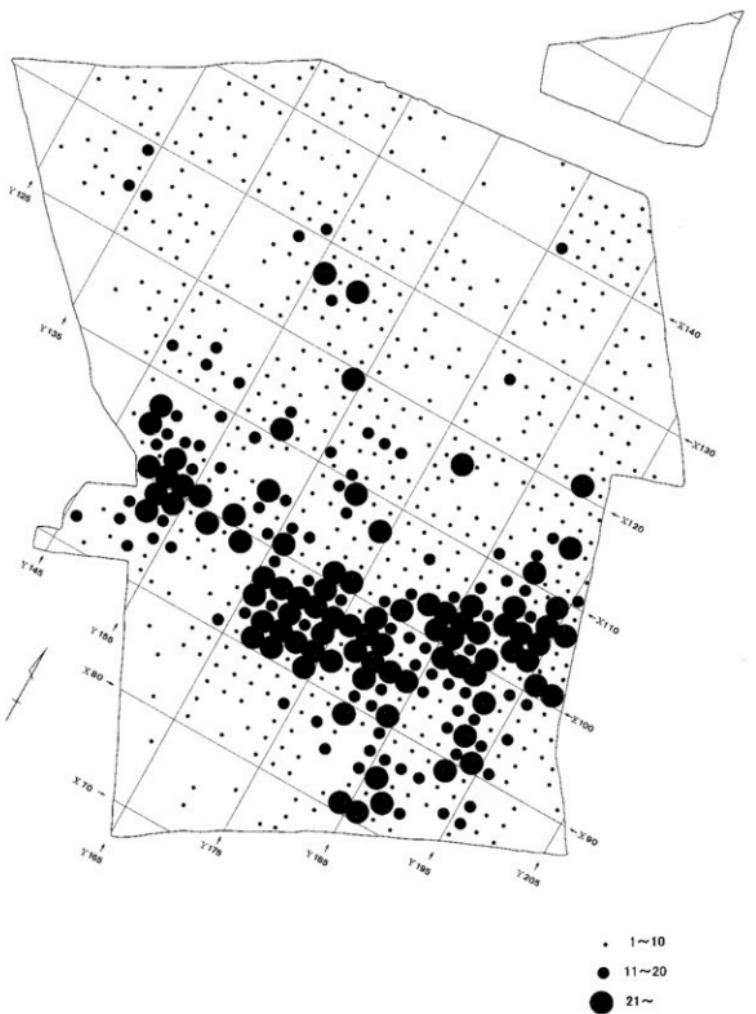
①**土師器皿**：土師器皿は6,457点と最も出土点数が多いが、半面個々の型式属性に乏しく、とくに小破片では法量や型式の識別が困難な場合が多い。このため今回は大雑把な把握のみに留めておく。まず各分割地区での出土数量比では、北半部1,327点（20.6%）、南半部4,478点（69.4%）、旧河道 SR01 では575点（8.9%）となる。さらに出土傾向についてもう少し詳しくみてみると、土師器皿の出土に地域的偏りがあることが分布図から読み取ることができる。とくに北半部と南半部の境界となる調査地の西壁中央付近と南壁中央付近、およびSR01南端付近の3点を結ぶ三角形の地域に土師器皿が集中して出土する様相が明らかである。その分布の中心は、① A 地区の建物群の中で常に既主的な位置を占めていた大型建物（二期 SB026、三期 SB024、四期 SB025）付近、②その東側で一期に群集土抗がみられ、さらに二期以降四期一期まで、概ね2棟の建物が同位置で連續変遷している地域、③さらに西端側で三期に群集土抗がみられる地域、の3ヶ所にあり、これらの各地点で土師器皿の出土が集中する傾向がみられる。これに比べ北半部は、二期以降に建物群が多くみられるにもかかわらず、土師器皿の出土量はそれほど多くない。同様に旧河道 SR01内でも下流側での土師器皿の出土は少ない。このことから土師器皿の出土は、一般的な居住棟と考えられる北半部の建物群ではあまりみられず、集落全体の中核をなす大型建物付近からその東側の旧河道 SR01の河岸に至る地域、および群集土抗がみられる地域の3ヶ所に偏ることが明らかである。このことから土師器皿が一般的な建物群からやや離れた場所で、あまり日常的でない特定の目的のために使用された可能性が、この分布の偏りからも窺うことができる。

②**珠洲**：珠洲は合計3,999点と、土師器皿に続く出土量がみられる。珠洲の器種には大きく壺・甕・捕鉢の三者があり、それぞれ用途・機能を異なる。このため全体を一括して検討するのではなく、壺・

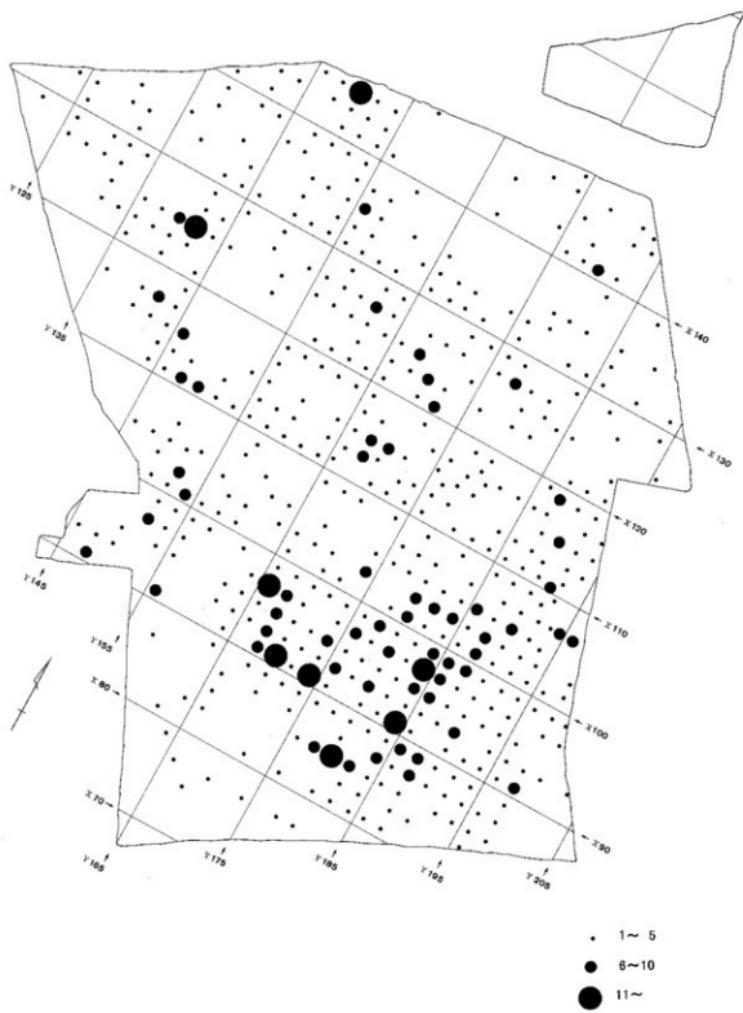
甕・擂鉢の各器種毎に分離して組成比率と分布の傾向をみてみたい。まず珠洲全体では北半部1,444点(36.7%)、南半部2,007点(51.0%)、旧河道SR01が481点(12.2%)、となる。3地区の合計が3,932点と総計より67点少ないので、排土からの表面採集など出土地点が不明なものも総計に含んでいるためである。次に器種ごとの比較では、全体では擂鉢1,578点(39.5%)、甕2,058点(51.5%)、壺363点(9%)となる。地区別では、まず北半部では擂鉢547点(37.9%)、甕737点(51.0%)、壺160点(11.1%)となる。南半部では擂鉢866点(43.1%)、甕1,017点(50.7%)、壺124点(6.2%)、旧河道SR01では擂鉢142点(29.5%)、甕267点(55.6%)、壺72点(15.0%)となる。点数の比率では全ての地区で甕が卓越し、次いで擂鉢が多く、相対的に壺は少ない。この点についてさらに別の視点から検討するため、各器種の破片をさらに口縁部、体部、底部別に集計してみた。これによると擂鉢全体では口縁部563点、体部716点、底部299点、甕では口縁部151点、体部1,868点、底部39点、壺では口縁部68点、体部272点、底部23点となる。このことからもわかるように、甕は口縁部や底部よりも体部が格段に多く、体部の表面積の大きいものもある。破碎片として数が大幅に増加している。そこで底部破片のみに着目して比較すると、擂鉢299点、甕39点、壺23点となる。この点数が同一個体の可能性を考慮しない最大個体数を示すものと考えた場合、甕は擂鉢の個体数の10%程度しかないことがわかり、珠洲の中での甕の実態的な組成を窺うことができる。次に各器種の空間的な分布であるが、擂鉢の場合南半部のそれも大型中心建物の周辺に出土が集中する様相がみられる。甕については調査地全体に分散しており、とくに建物群の密集する地域に多く出土する傾向がある。壺はもともと破片数も少ないとおり、どれだけ実態を示すかわからないが、とりあえず甕と同様に建物群と重複する全域で広く出土している。

③八尾：八尾は合計2,799点をカウントした。八尾も珠洲と同じく大きく壺・甕・擂鉢の3器種がある。そこで珠洲と同様に壺・甕・擂鉢の各器種毎に分離して組成比率と分布の傾向をみてみた。まず八尾全体では北半部916点(33.1%)、南半部1,266点(45.8%)、旧河道SR01の582点(21.0%)、となる。3地区の合計が2,764点と総計より35点少ないので理由は、珠洲と同様である。次に器種ごとの比較では、まず全体では擂鉢117点(4.2%)、甕2,637点(94.2%)、壺45点(1.6%)となる。地区別では、北半部は擂鉢28点(3.1%)、甕868点(94.8%)、壺20点(2.2%)となる。南半部では擂鉢73点(5.8%)、甕1,179点(93.1%)、壺14点(0.11%)、旧河道SR01では擂鉢16点(2.7%)、甕557点(95.7%)、壺9点(1.6%)となる。点数の比率では全ての地区で甕が圧倒的に数で卓越している。これに次ぐ擂鉢は2~5%で、壺はさらに少ない。次に珠洲と同様に、各器種の破片をさらに口縁部、体部、底部別に集計してみた。これによると擂鉢全体は口縁部33点、体部67点、底部17点、甕は口縁部48点、体部2,549点、底部40点、壺は口縁部11点、体部25点、底部9点となる。珠洲と同じく底部破片数を最大個体数と考えた場合、擂鉢17点、甕40点、壺9点となる。このことから甕は珠洲とほぼ同様の個体数があるのに対し、擂鉢ははるかに少なく、八尾擂鉢の非日常的使用の実態が浮かび上がる。また甕についても、八尾の生産年代幅をどれくらいにみるとかでやや異なるものの、ある時期の貯蔵容器として八尾が珠洲に対し主体的に使われていた可能性もある。次に各器種の平面的な分布であるが、擂鉢の場合点数は多くないが、南半部の大型中心建物の周辺に出土がやや集中する傾向がある。同様に旧河道SR01の北半部でも出土が集中する部分が認められる。甕についても擂鉢とほぼ同様の傾向が看取できる。壺は破片数が少なく、分布がまとまるまでは至らない。

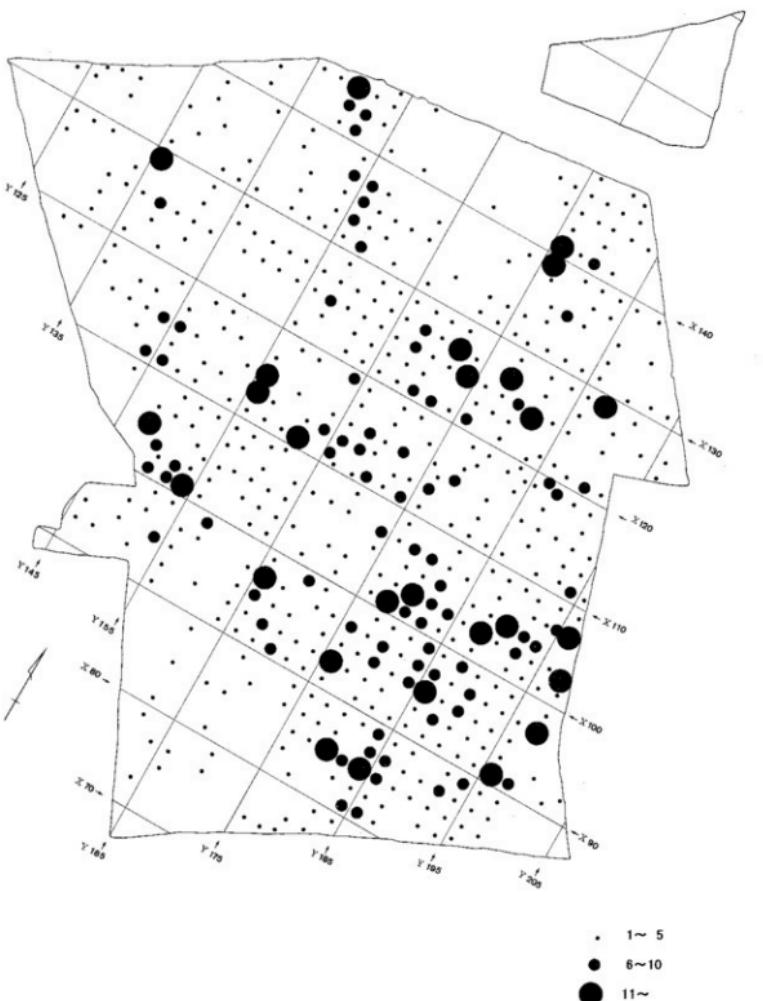
④中国陶磁：中国陶磁については既に詳しく触れたので、ここでは調査地内での分布の様相のみを記しておく。全体の傾向では調査区中央付近から南半部分に出土の広がりがみられる。とくにSR01の



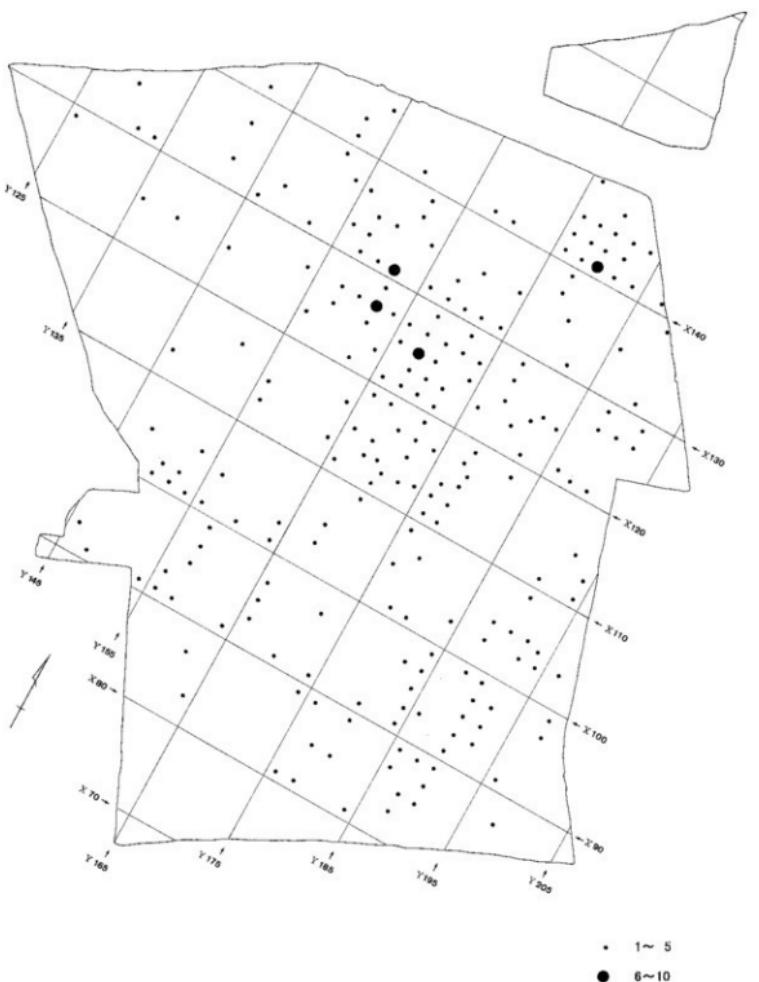
第9図 土器皿の出土分布図



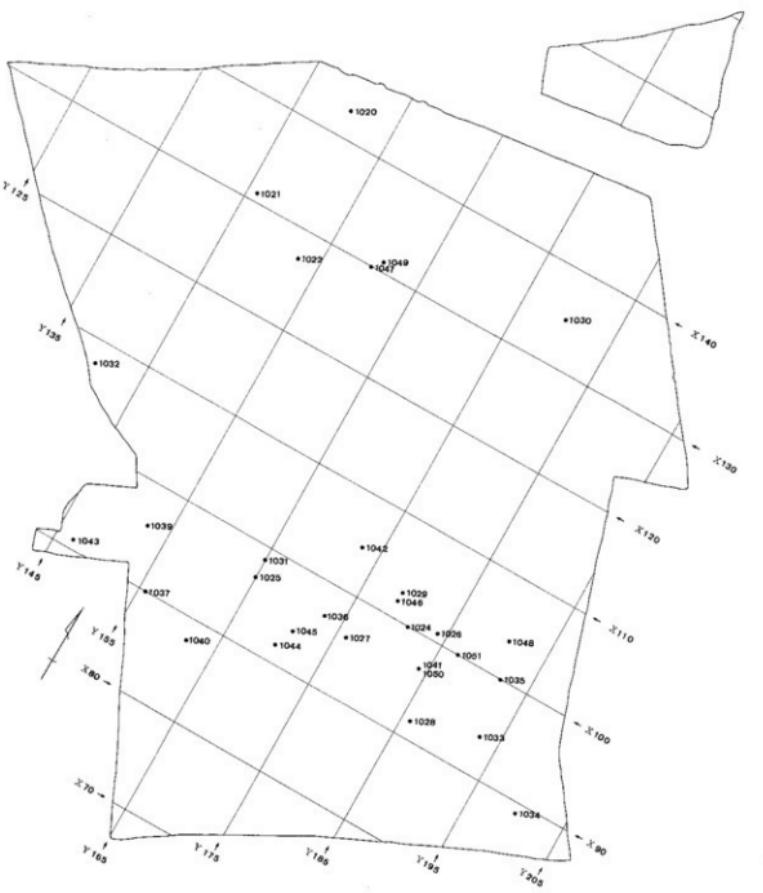
第10図 珠洲殻鉢の出土分布図



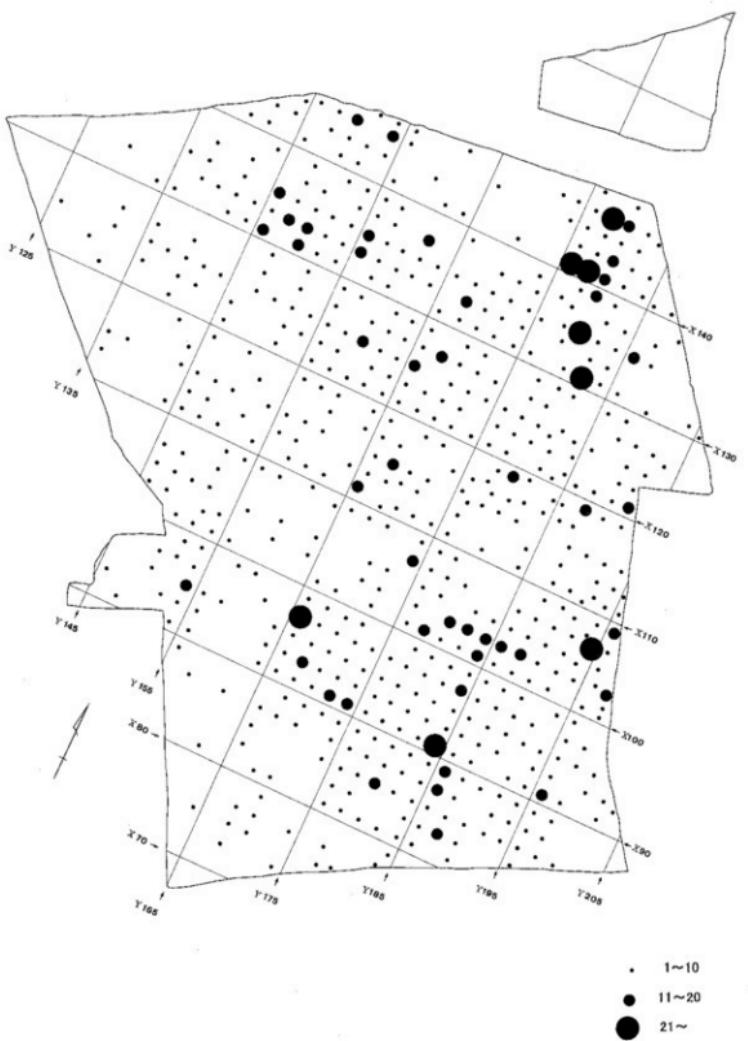
第11図 珠洲甕の出土分布図



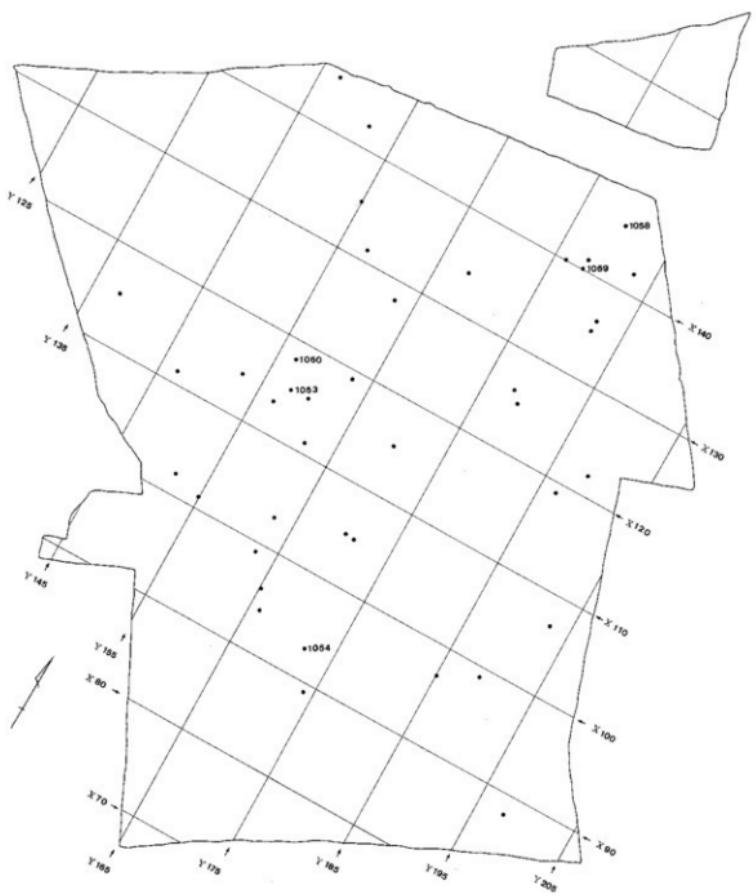
第12図 珠洲壺の出土分布図



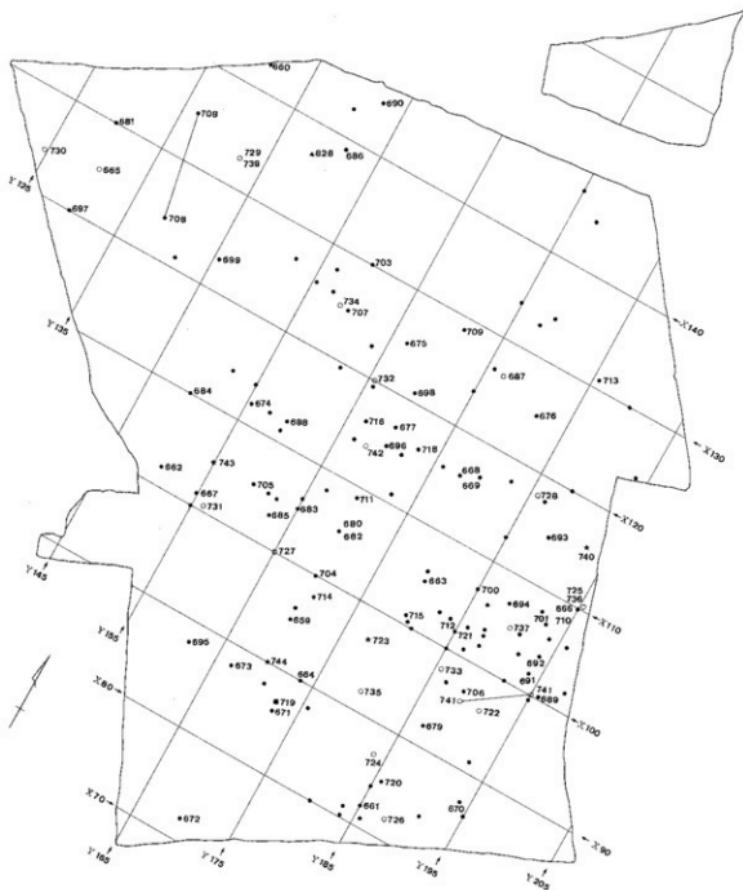
第13図 八尾擂鉢の出土分布図



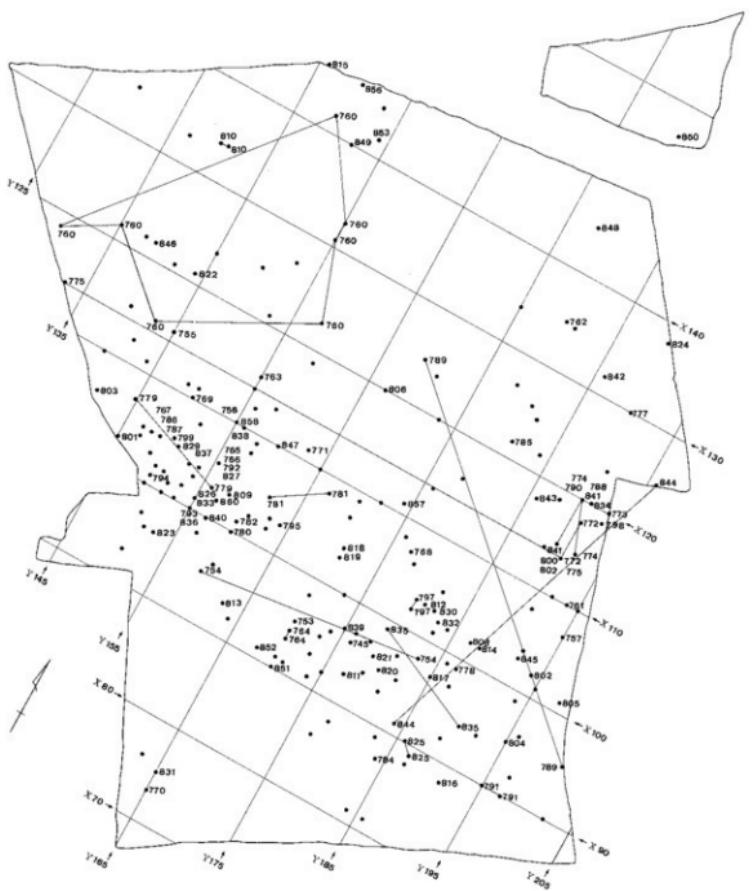
第14図 八尾塚の出土分布図



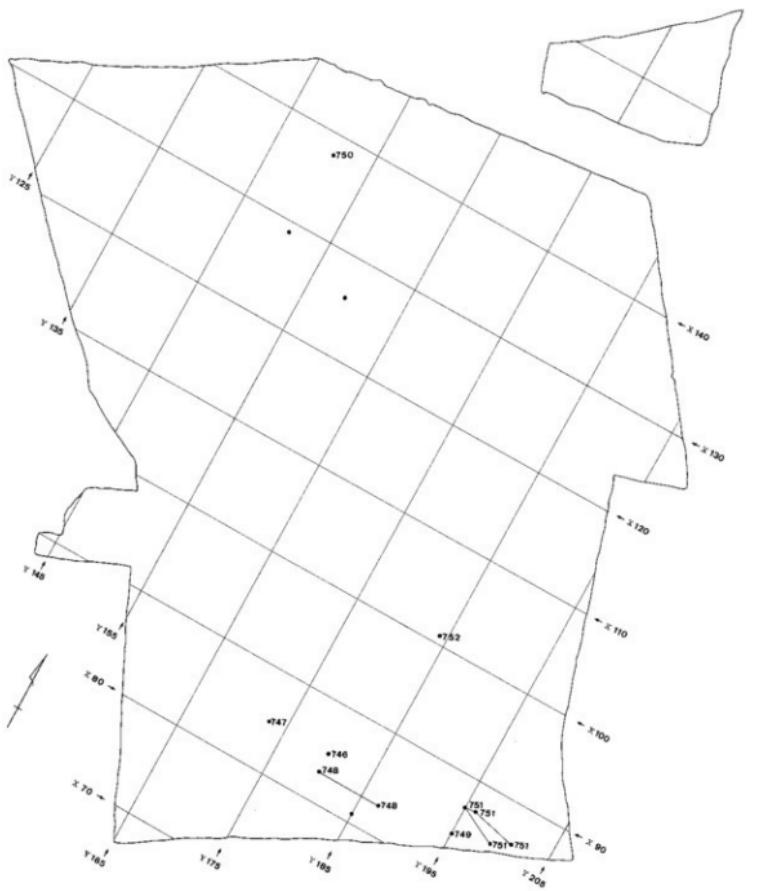
第15図 八尾塚の出土分布図



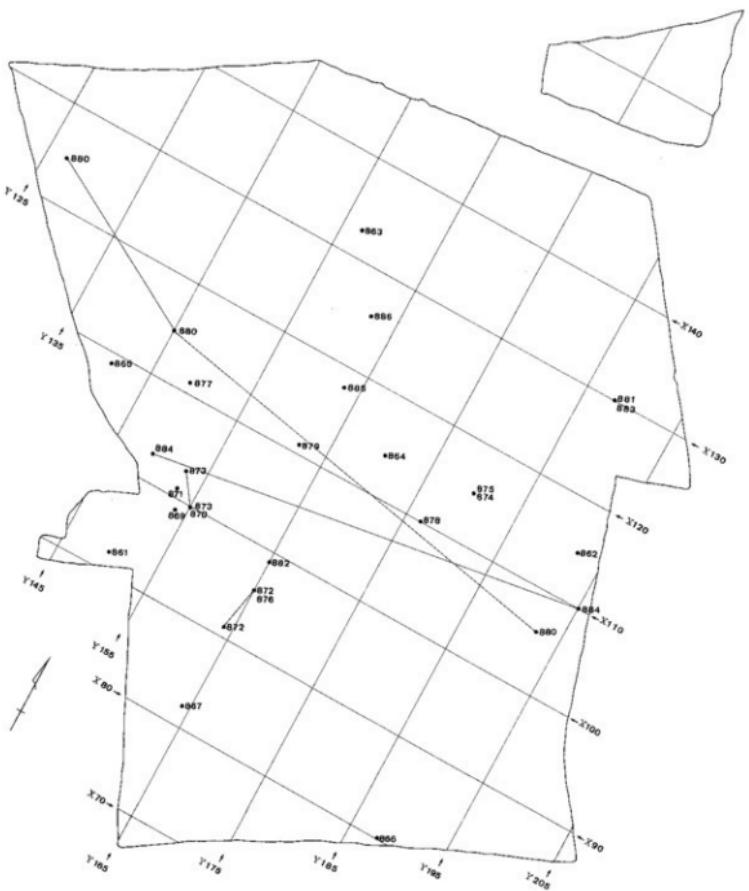
第16図 中国陶磁の出土分布図



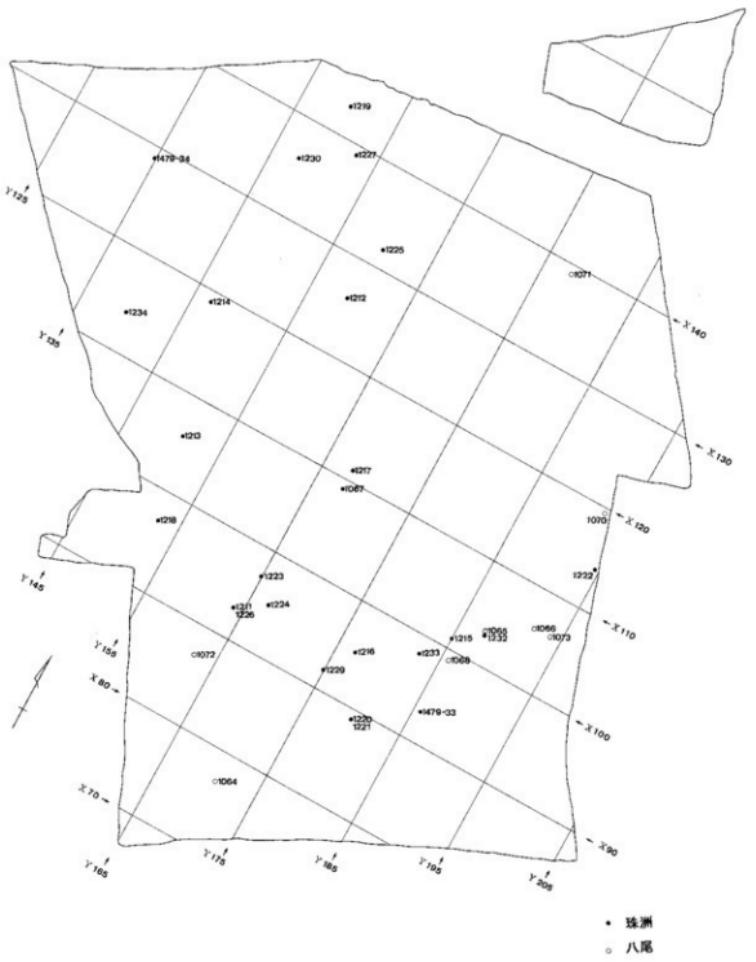
第17図 濑戸美濃施釉陶器の出土分布図



第18図 山茶椀の出土分布図



第19図 瓦質土器の出土分布図



第20図 陶片加工円盤の出土分布図

南端付近の河岸に近い部分にまとまる傾向がみられる。これに比べ、土器皿にみられたような、南半部中央の大型建物付近での中国陶磁の出土はそれほど多くない。また建物群が多く所在するにもかかわらず、北半部での中国陶磁の出土はそれほど多く認められない。

⑤瀬戸美濃施釉陶器：中国陶磁と同様、調査地内の分布の様相のみ取り上げておく。瀬戸美濃施釉陶器では南半部中央の大型建物付近、西壁中央の南半部と北半部の境界付近、旧河道SR01内の南側の石組遺構01付近の3カ所に出土のまとまりがみられる。瀬戸美濃の場合、藤澤編年古瀬戸後I～II期に出土のピークがあることは既に述べたが、これを集落変遷の時期と照らし合わせると概ねIV期の段階とクロスする。そこでIV期の建物群構成と配置を参考にこれらの瀬戸美濃の分布を重ね合わせると、区画1のSB25（IV a期）ないしはSB30（IV b期）周辺、区画2のa群建物周辺（IV a・b期）に、瀬戸美濃の出上が重なることがわかる。なお旧河道内部からの出土は、南端付近に多い傾向が明らかである。

⑥山茶椀：点数は少ないが、ほぼ調査区の南壁付近に集中して出土していることがわかる。この山茶椀の年代観が13世紀代であることから、I期の建物群にこれらの山茶椀が伴う可能性が高い。I期はa～c期に細分されるが、どの建物群にこれらの山茶椀が伴うかは即断できない。但し北半部で出土する3破片の山茶椀の周辺にはI b期の建物SB084があり、山茶椀自体はこの時期に伴う遺物の可能性がある。

⑦瓦質土器：瓦質土器は數自体が少なく、分布のまとまりに欠ける。また接合関係でもかなりの距離をおいての接合がみられる。概ねIV期の区画2のa群建物の周辺に多い傾向があるが、確信をもって断言できるほどの数ではない。

⑧陶片加工円盤：陶片加工円盤には八尾と珠洲の破片を転用したものがある。数が少なく傾向を把握できるところまでいかない。とりあえず南半部に多く分布し、とくに大型中心建物付近から東側に分布が集まる傾向が認められる。

### (3) おわりに

以上道場I遺跡A地区の調査成果について、建物群の変遷と土器・陶磁器組成の2点から考察を試みた。これらの分析手法は今回の報告だけに留まるものではなく、同様の手順での検討を他遺跡でも積み重ね、今後とも比較していく必要があろう。とくに周辺は中名I・V・VI遺跡をはじめ、中世の遺跡が多数これまでにみつかっており、過去に発掘調査も実施されている。このなかで今回は時間的な制約もあり、中世遺跡としての道場I遺跡の評価についてほとんど触れることができなかった。そこで最後に将来的な検討への課題提起を兼ねて、この点を少し考えてみたい。

まず道場I遺跡の性格を考えるうえで重要なのは、検出された建物群の性格についてであろう。とくにA地区の南半部中央付近で検出された大型建物は、他の建物群とは明らかに一線を引き得る内容を有する。この建物の萌芽はすでにI c期のSB038にはみられるが、その存在が明確になるのはII期のSB026以降である。以後ほぼ同位置で建替えを重ねながら、III期のSB024からIV a期のSB025へ、さらにIV b期のSB030へと、集落変遷の最終段階までその建物系譜が連続している。とくにIII期以降においてはこの建物の周辺に区画の構を伴うようになり、屋敷地とでもいうべき領域が明示されるようになる。このような屋敷地の区画化はとくにIV期において顕在化する。なかでも大型建物の所在する区画の範囲は、他の区画に対して明らかに広く、この点において大型中心建物とその区画内に所在する建物群が、他の周辺建物群に対して卓越性を有することは明らかである。同様の傾向は出土遺物

においても看取できる。まず本遺跡では土師器皿が多量に出土している点が挙げられる。これらの土師器皿の出土傾向をみると、饗宴処理土抗のような一括大量出土はみられないものの、土師器皿の出土が南部の大型建物とその区画内周辺に集中・偏在することが明らかである。また大型中心建物に関連してⅢ期以降、とくにⅣa期において、旧河道SR01を正面側とする建物配置の意識が顕在化する。同時にⅢ期以降に明確になる大型建物の東側における広場状の開放景観の成立と、中央の石組井戸SE035の存在、さらにその南側に東西に連接して長期にわたり建物系譜が継続する2棟の掘立柱建物、あるいはSR01の河岸に接して構築され、棧橋状造構の可能性のあるSR01石組造構01の存在など、他の建物群にはみられない内容の遺構が顕著である。これらの遺構群も本来は大型建物に付設された諸施設の一環である可能性が高い。この他に集落景観の問題では、Ⅳ期に形成される屋敷地割ともいうべき区画の成立の問題も重要であろう。

次に本集落の居住者像、あるいは集落の主体的な経営者像をどのように考えればよいか、若干検討しておきたい。「婦中町史（通史編）」によると、中世の婦負郡内には徳大寺領莊園の宮川莊がかつて所在していたとされる。この宮川莊は、現在の婦中町から神通川を越えて富山市・大沢野町にまでまたがる広大な莊城を有していたとされる。宮川莊は、文和3年（1354年）の足利義栓御判御教書案（徳大寺文書）に名がみえるのが最もはやく、このころには既に莊園として成立していたことがわかる。この宮川莊と本遺跡との関わりを示す直接的な物証はないものの、道場I遺跡周辺もまた、この宮川莊の一角に位置していた可能性が高い。また当地の居住者あるいは経営者像を考える上で興味深い遺物が、本調査地のSE105から出土している。この井戸の構造は木枠組のもので、本集落のなかでも古い段階に遡る上する井戸のひとつである。この井戸の中から1枚の墨書き木札が出土している。木札には両面に墨書きがあり、裏面の左下には大きく花押が付されている。表側は3行以上にわたる文言で、2行目は「□□□ベシ」とも読めるという。3行目は年号と考えられ「□□五年二十三日」と判読できる。正確な年号はわからないものの、集落変遷の初期の井戸であることから、13世紀代から14世紀初頃の年代の可能性がある。この木札の性格については、新潟県馬場屋敷遺跡出土の山札・茅札に形状・書式・時期などが類似し、同様のもの可能性が高いとされる。また花押については莊官クラスの人物のものと考えられている。これが宮川莊の莊官かどうかはわからないが、莊官クラスの人物と本遺跡との間に何らかの関わり合いがあったことは指摘できる。この他にも鳥帽子や銅製提子が出土している他、陶磁器では小破片ながら龍泉窯系青磁の大型盤類の出土が確認され、一般集落とはやや隔離した出土遺物の様相がみられる。また中国陶磁や瀬戸美濃施釉陶器、畿内産の瓦器や瓦質土器、東海産の山茶碗などその豊富な撒入遺物の存在、旧河道の河岸を建物群の正面に見据えた建物群の展開や区画配置の構造、河岸に接した公的な広場空間の形成や棧橋状造構の存在、Ⅱ期に遡る大型建物とその建物系譜の持続的な変遷、Ⅱ期の半地下式建物にみる大型倉庫ないしは貯蔵建物の存在なども、本遺跡の性格の一端を示すものと言えよう。但し掘開いされ、その囲繞性がきわめて強調される居館遺跡に比べると、道場I遺跡の場合やや異なる印象を受ける。とくにⅢ期以降全ての施設・建物群が旧河道に沿って細長く展開しており、旧河道側からみると開放景観を呈している点に大きな特徴がある。またⅣ期に顕著な建物群周辺の区画溝も、多くは連続せずに途切れるものが多く、これは大型建物の所在する区画Iでも同様である。このことからも、道場I遺跡を中世莊園の莊官クラスの居住した館と評価するにはやや躊躇せざるおえない。むしろ道場I遺跡の場合、莊園経営に関わりの深い物流拠点としての性格を重視し、莊園内から外地に向けた物資集散ネットワークの基礎となるような機能を担った遺跡の可能性が高いことが指摘できる。以上想定の赴くまかなり飛躍した結論となってしま

ったが、もとより明示したように本遺跡の歴史的な位置づけは道場I遺跡のみで完結すべきものではない。とくに道場I遺跡の周辺には、中名I・V・VI遺跡をはじめとする中世遺跡が多数群在しており、さながらひとつの大きな中世遺跡群を形成しているといつてよい。この中で本調査の契機となった県営公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査報告書も、本書が3冊目となる。来年度は婦中町域の調査の締めくくりとなる「中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡」の刊行が予定されており、婦中町域での調査報告はこれをもって終了することになる。同報告書では婦中町域のこれまでの調査を総括的に検討する予定であり、機会があれば今一度そのなかで道場I遺跡の評価を再検討してみたい。

なお「総括」の項を作成するにあたり、中国陶磁については山本信夫氏から、瀬戸美濃施釉陶器については藤澤良祐氏から、SE105出土の墨書き木札については富山大学の富田正弘氏、鈴木景二氏から、貴重なご教示を賜った。文末ではあるが記して感謝申し上げたい。

#### (引用参考文献)

- ・婦中町・婦中町史編纂委員会『婦中町史(通史編)』1996
- ・婦中町教育委員会『県営公害防除特別土地改良事業に係る埋蔵文化財包蔵地図調査報告書』1999
- ・新潟山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所『清水島II遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡発掘調査報告書』2002
- ・新潟山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所『中名I・V遺跡発掘調査報告書』2003
- ・中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真島社 1955
- ・森隆「富山県の中世土器(資料編)」(財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所『紀要』第6号)2003
- ・横田賛次郎・森田駿「大宰府出土の輸入中國陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4)1978
- ・山本信夫「大宰府条坊跡II」(『太宰府町の文化財』第7集)太宰府市教育委員会1983
- ・山本信夫「中世前期の貿易陶磁器ーその分析視点ー」(『原遺跡七郎丸1地区・口寺田遺跡』)国東町教育委員会1999
- ・森勉「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」(『貿易陶磁研究』No.2)1982
- ・上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究』No.2)1982
- ・藤澤良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」(『東洋陶磁』第8号)1982
- ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群II-古瀬戸後期様式の編年」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X)1991
- ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群III-古瀬戸前期様式の編年」(『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3編)1995
- ・藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年」(『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10編)2002
- ・菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集)1989
- ・八尾町教育委員会『富山県八尾町長山遺跡・京ヶ峰古窯跡緊急調査概要』1985
- ・吉岡康暢「中世須恵器の研究」吉川弘文館1994
- ・鏡方正樹「井戸の考古学」同成社 2003
- ・市川秀之「西ノ辻遺跡出土の中世本器」「神並・西ノ辻・鬼鹿川遺跡発掘調査整理概要IV」大阪府教育委員会1987
- ・向井由紀子・橋本慶子「著」「(ものと人間の文化史)102」法政大学出版会 2001
- ・岩出隆「中世遺跡出土の下駄」(『朝倉氏遺跡資料館紀要』)1985
- ・三輪茂雄「(ものと人間の文化史)25」法政大学出版会 1978
- ・水野和雄「日本便考-出土品を中心として-」(『考古学雑誌』第70巻第4号)1985
- ・三島道子「富山・道場I遺跡」(『木簡研究』第22号)2000

柱立物一覽(1)

堀立柱建物一覧(2)

一貫(1)

井戸一覧(2)

(2)當一集

第一覽(3)

漏一覽(4)

土坑一覽(1)

土坑一號(3)

土壤(4)

土坑一覽(5)

土坑一覽(6)

土坑一墓(7)

土坑一號(8)

大型土坑一覽

### 土器・陶磁器一覽(1)

十器·陶磁器一覽(2)

### 十器，陶磁器一覽(3)

### 土器・陶磁器一覧(4)

十一器·陶磁器一覽(5)

十一、陶磁器一覽(6)

十器·陶磁器一覽(7)

### 土器・陶磁器一覽(8)

土器・陶磁器一覽(9)

土器・陶磁器一覽(1)

十一器·陶磁器一覽

十一器·陶磁器一覽(12)

土壤·陶磁器一號

土器・陶磁器一覧(4)



木製品一覧(4)

木製品一覧(3)

卷之三

木製品一覽(6)

六製品一覽(7)

(6)鳥一品種半

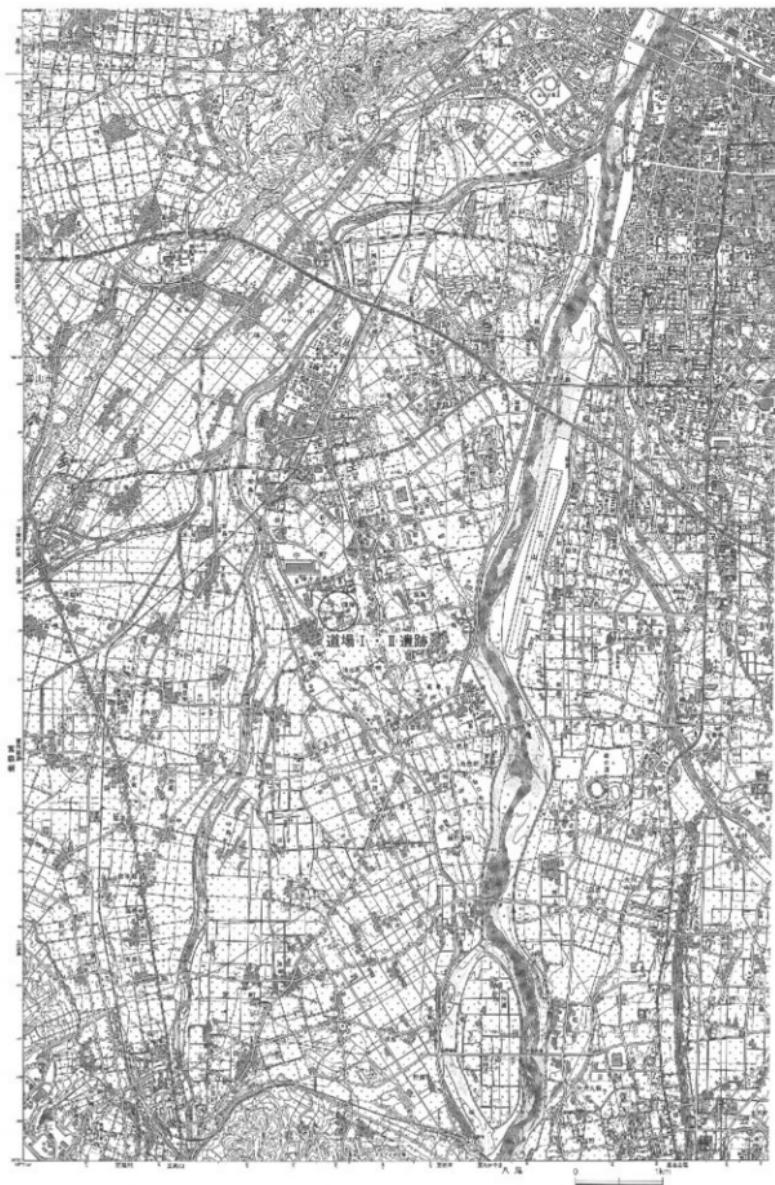
木製品一覧00

石製品一覽(2) 製品一覽(1)



三屬製品一覽(3)

# 図面

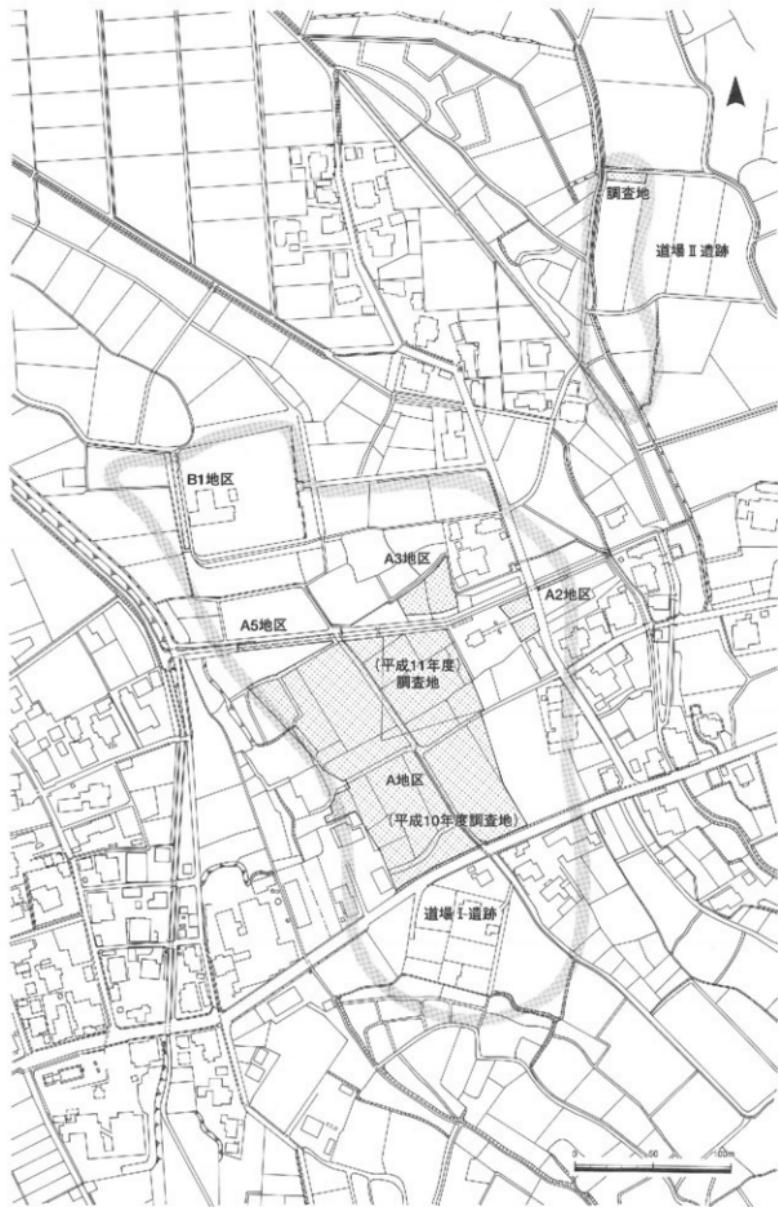


道場 I・II 遺跡位置図 (1:25000)

図面002



道場Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺遺跡分布図

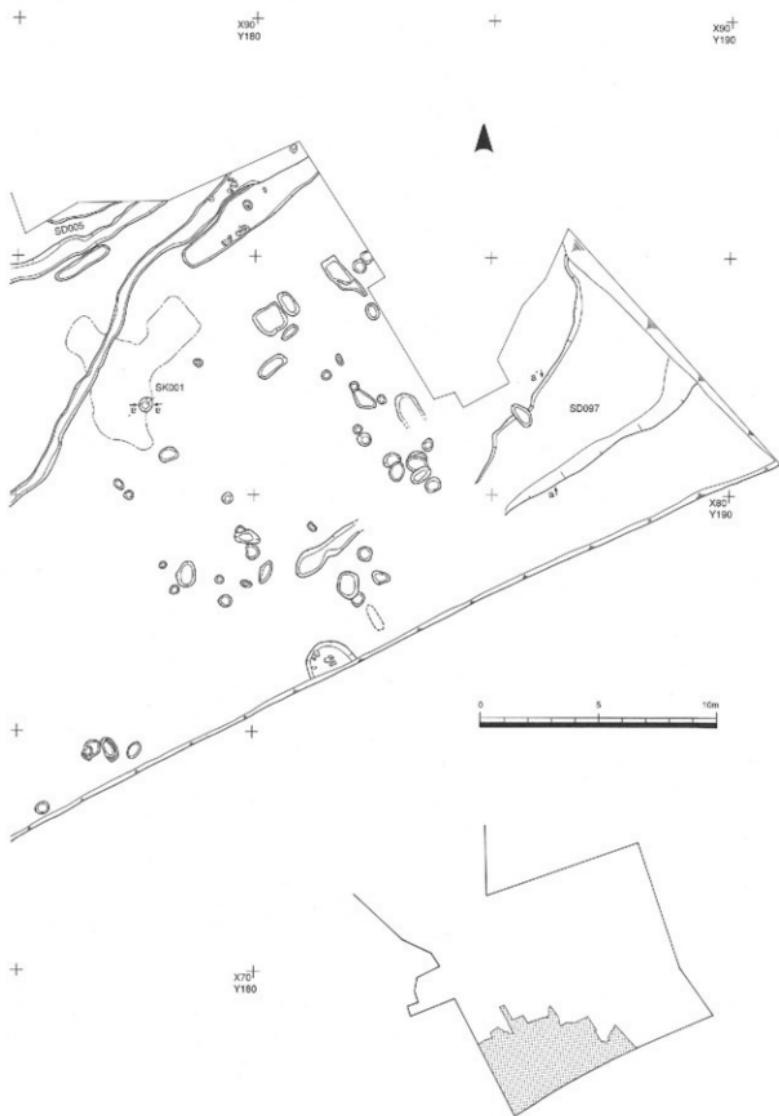


道場 I・II 遺跡調査地配置図

図面004



近世面遺構全体図(1)

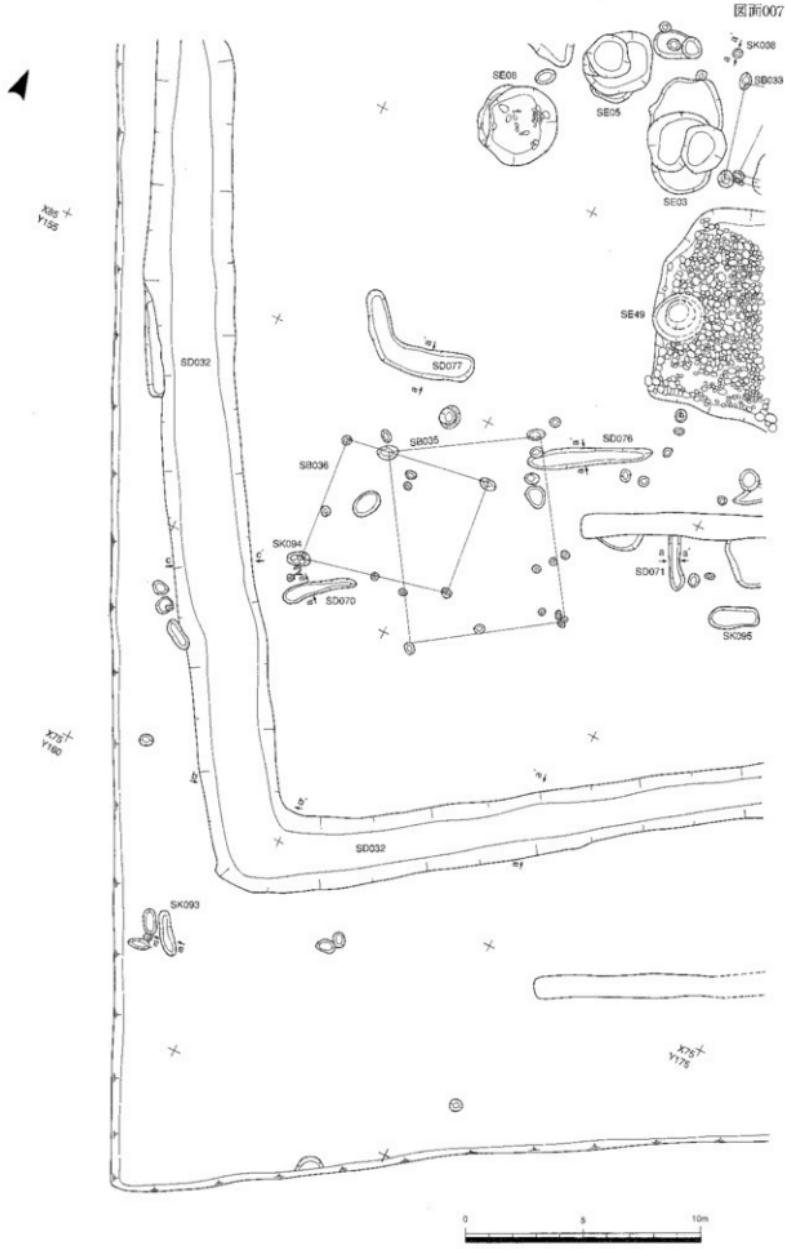


近世面遺構全体図(2)

図面006

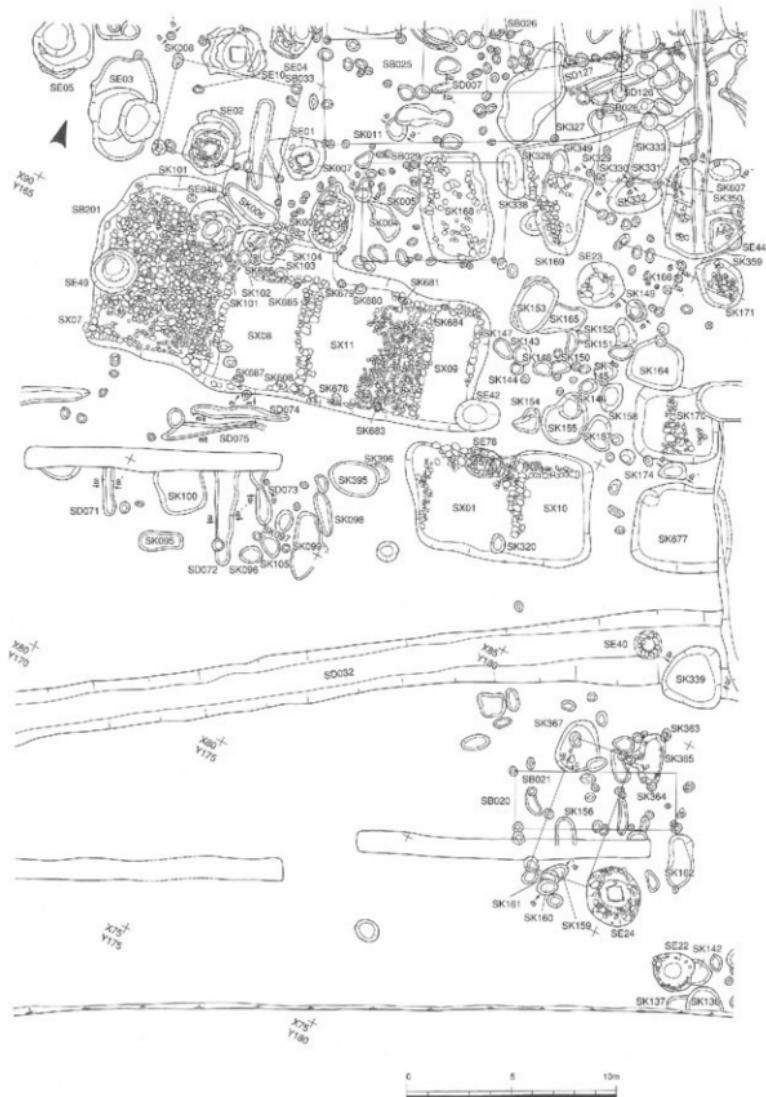


道場 I 遺跡A地区・A3地区造構全体図面分割区割り図

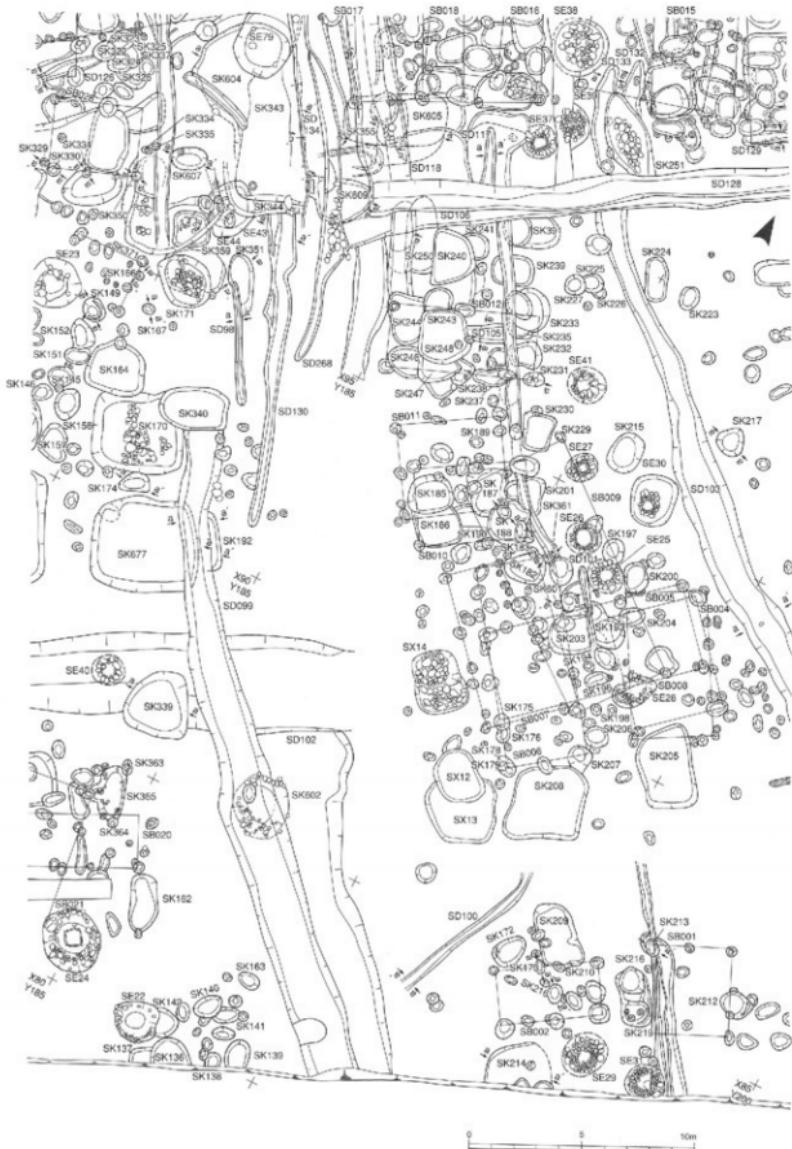


## A地区遺構全体図(1)

図面008



A地区遺構全体図(2)

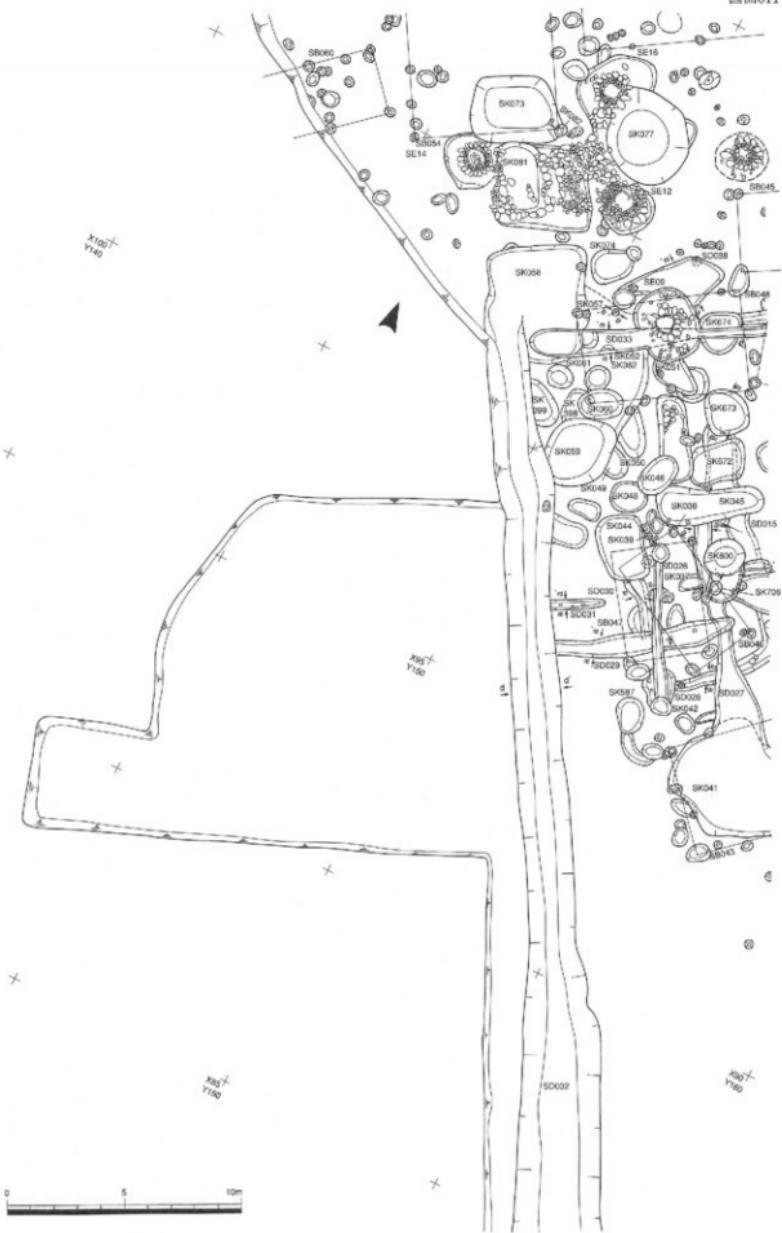


A地区遺構全体図(3)

図面010

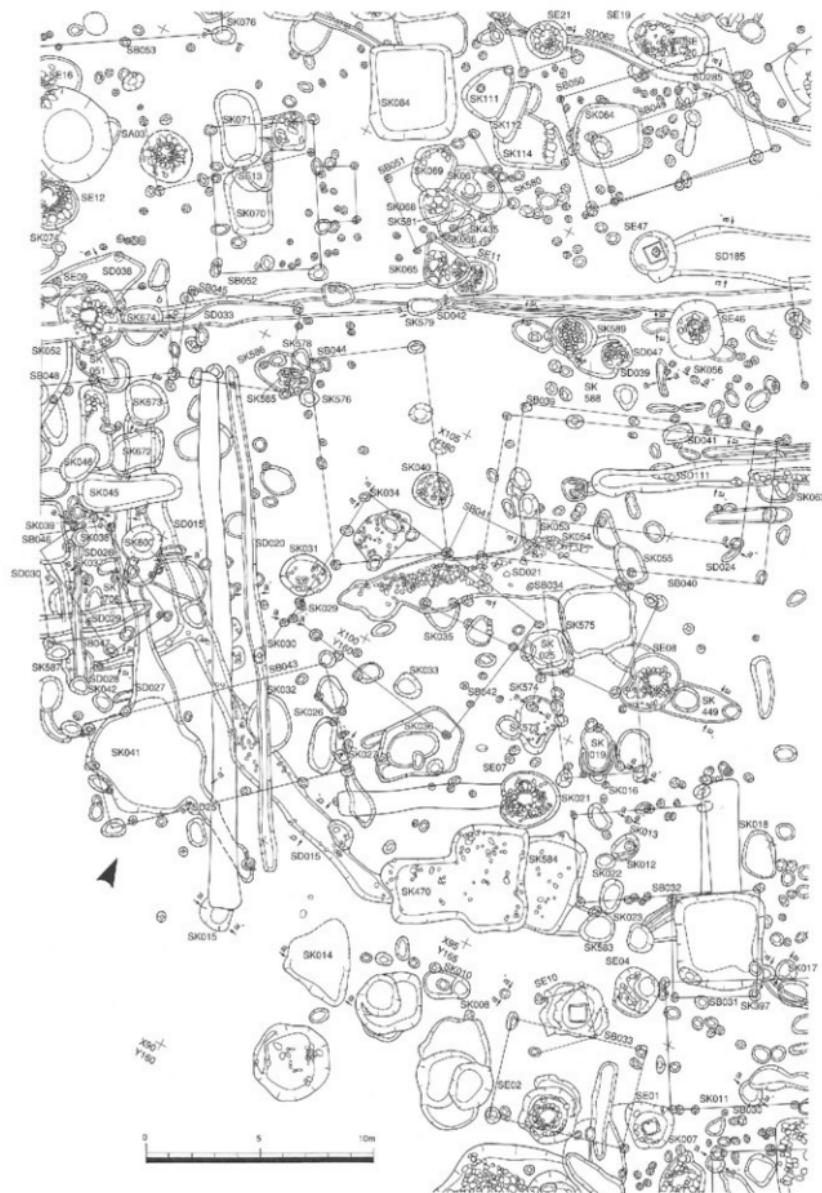


A地区造構全体図(4)

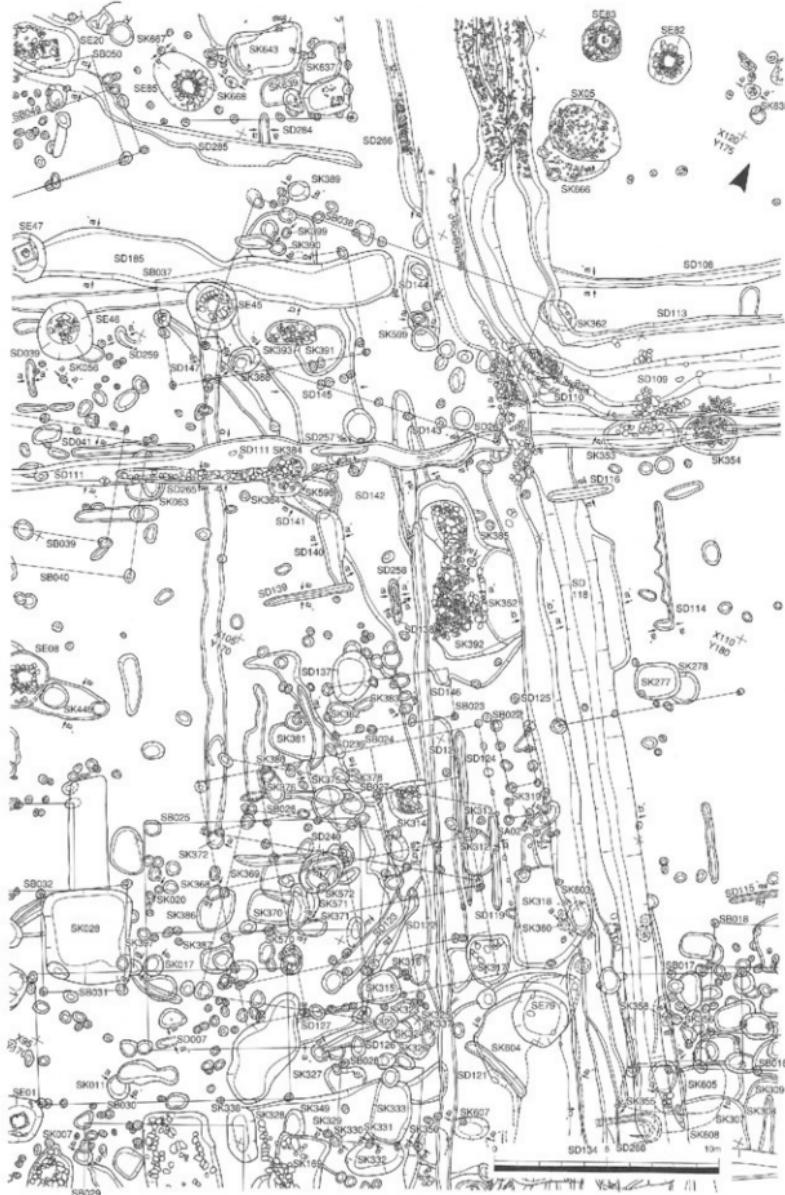


A地区遺構全体図 (5)

圖面012

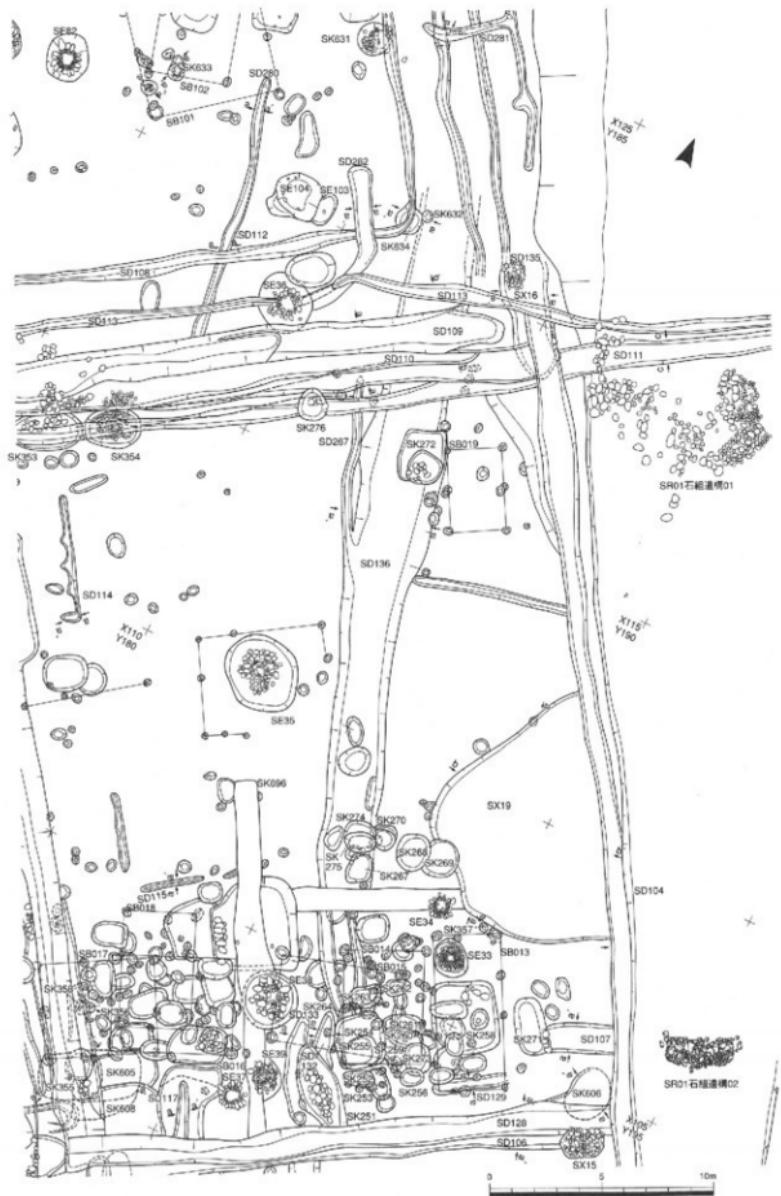


### A地区遺構全体図(6)



### A地区遺構全体図(7)

圖面014

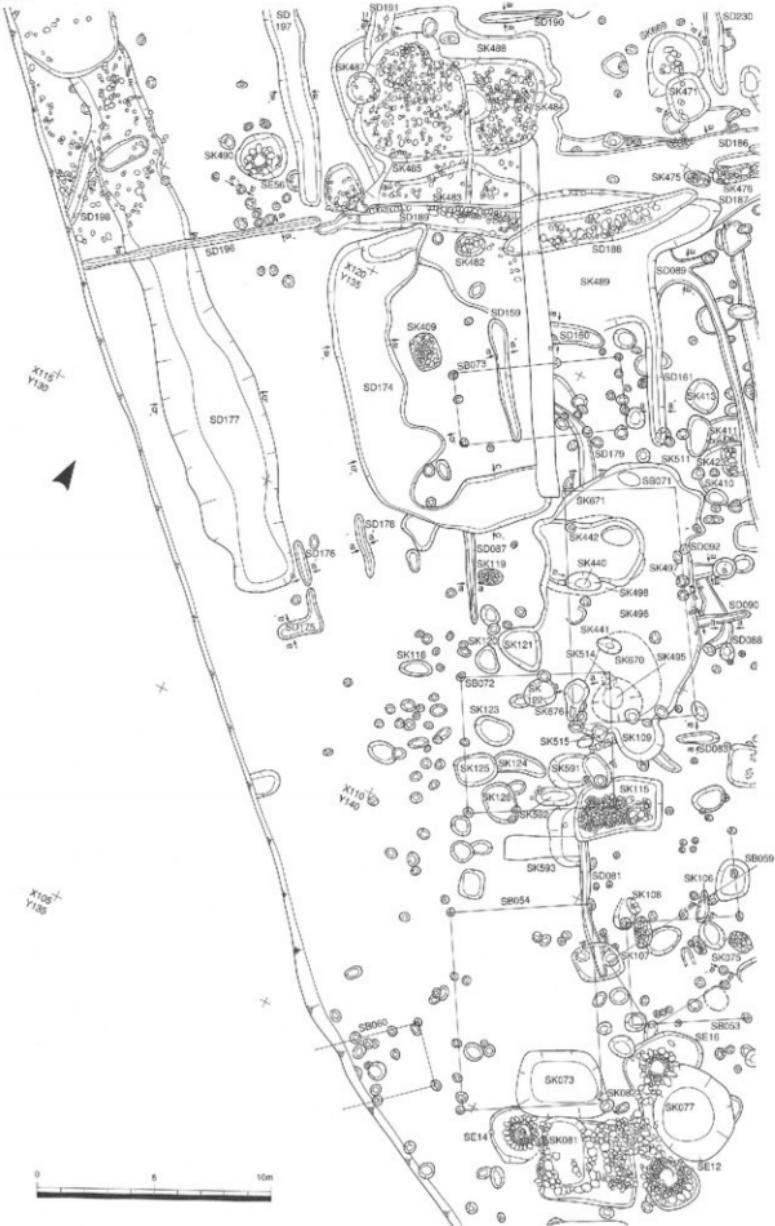


### A地区遺構全体図(8)

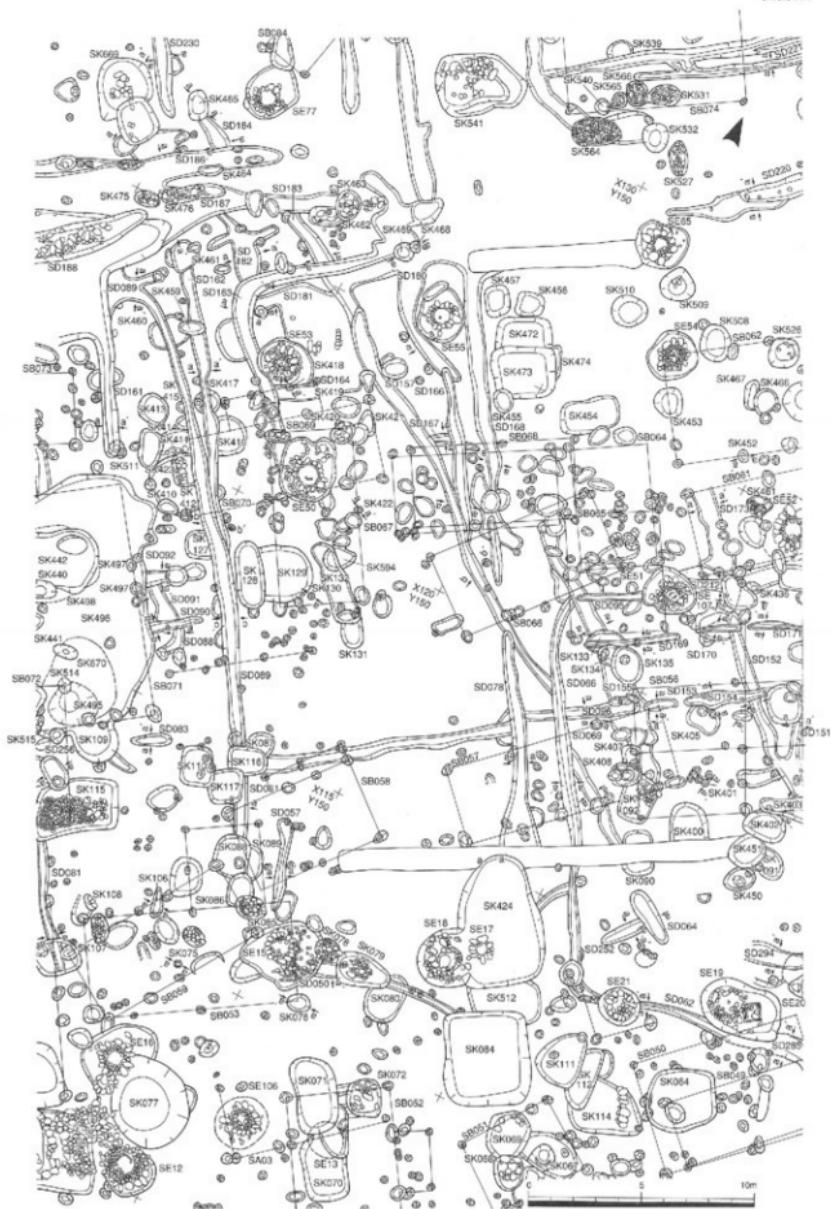


A地区遺構全体図(9)

図面016



A地区遺構全体図(10)

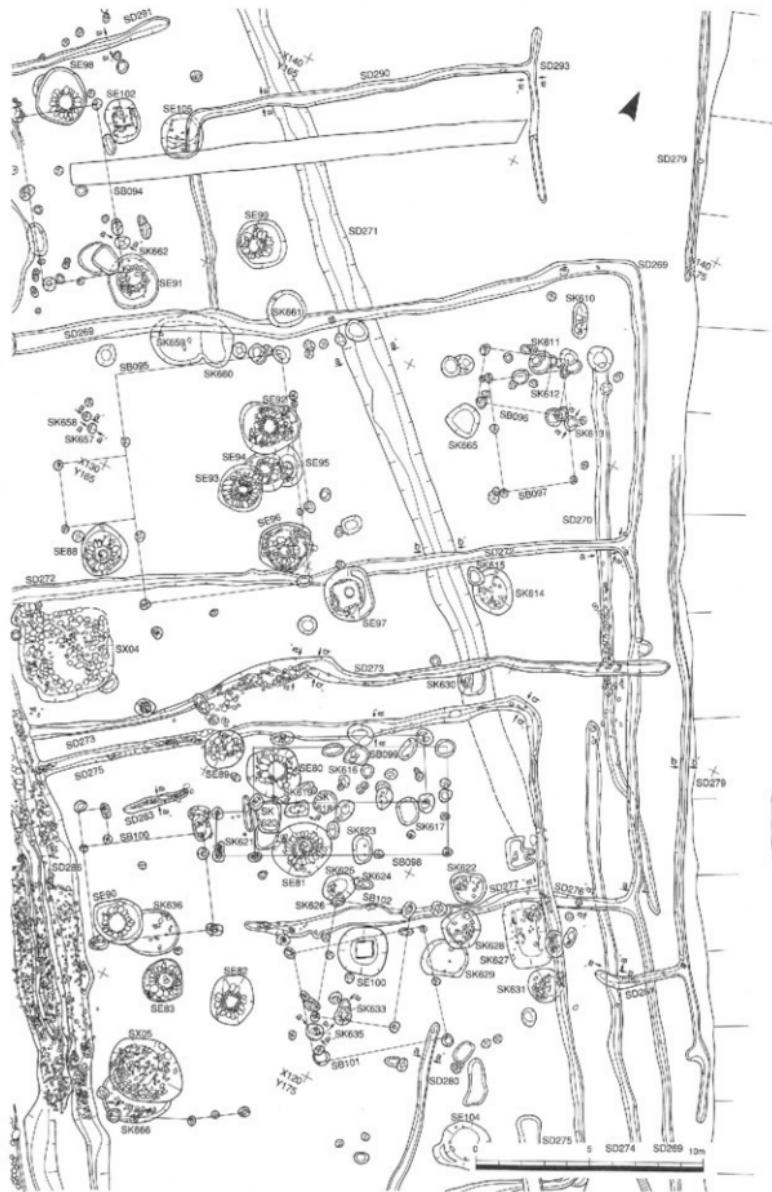


### A地区遺構全体図(11)

図面018



### A地区構造全体図(12)



A地区造構全体図 (13)

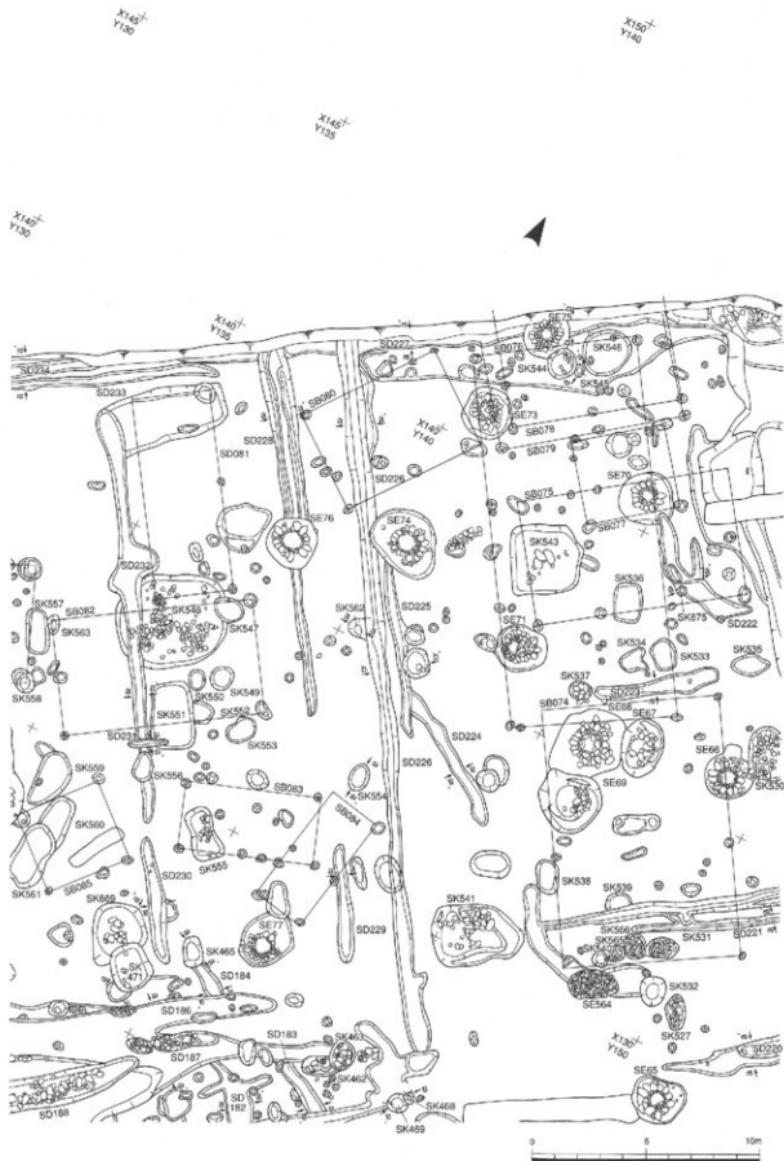
図面020



A地区遺構全体図(14)



A地区遺構全体図(15)

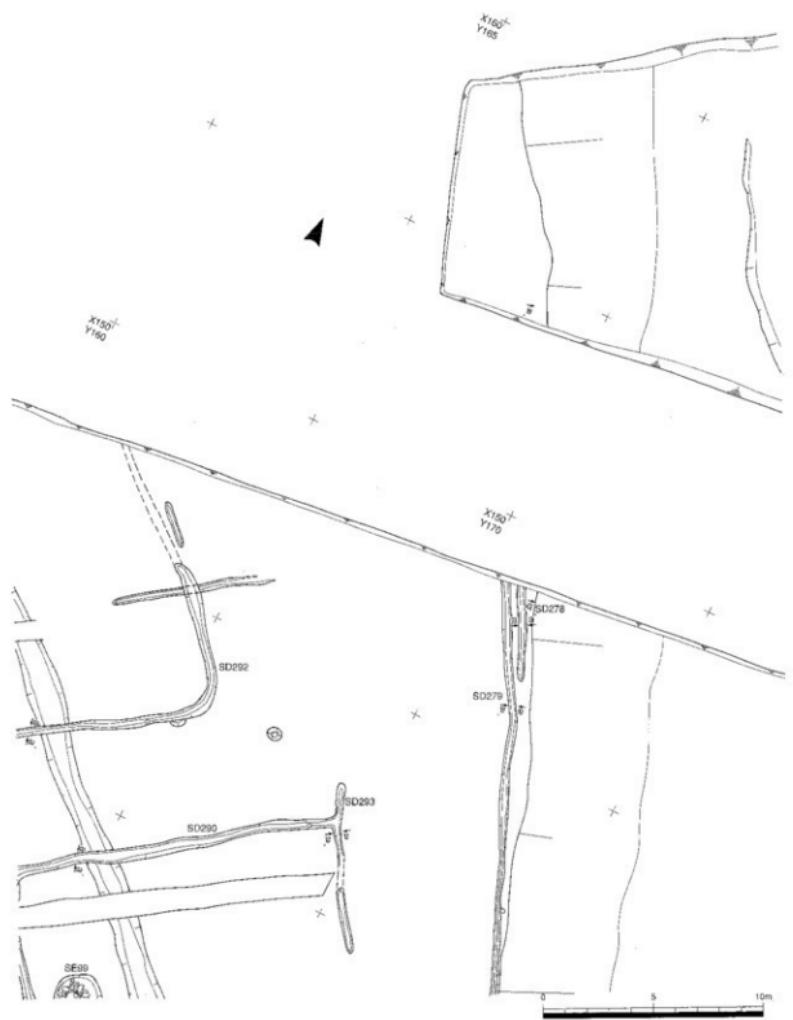


### A地区遺構全体図(16)

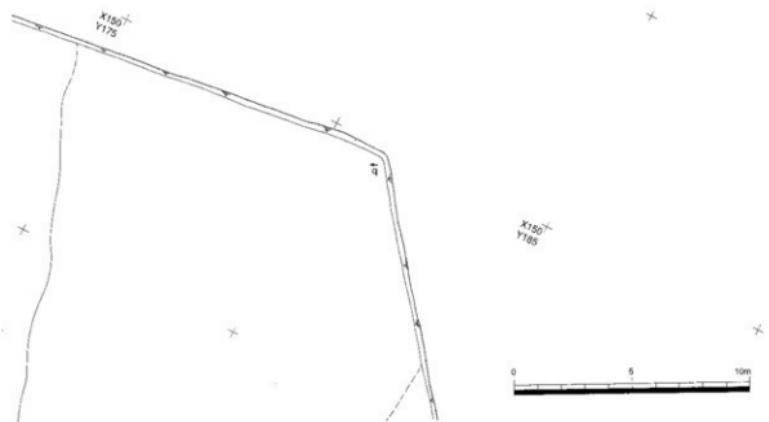
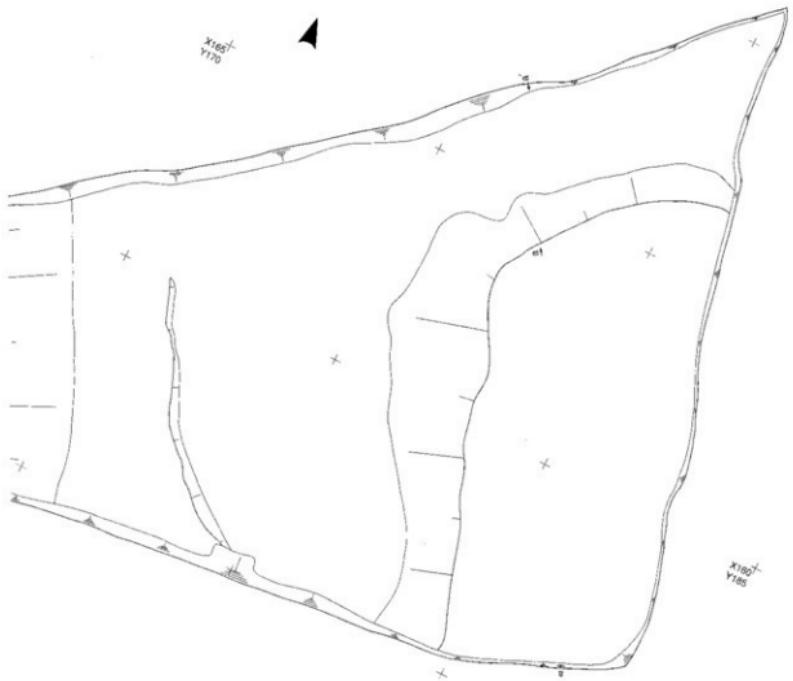


A地区遺構全体図(17)

図面024

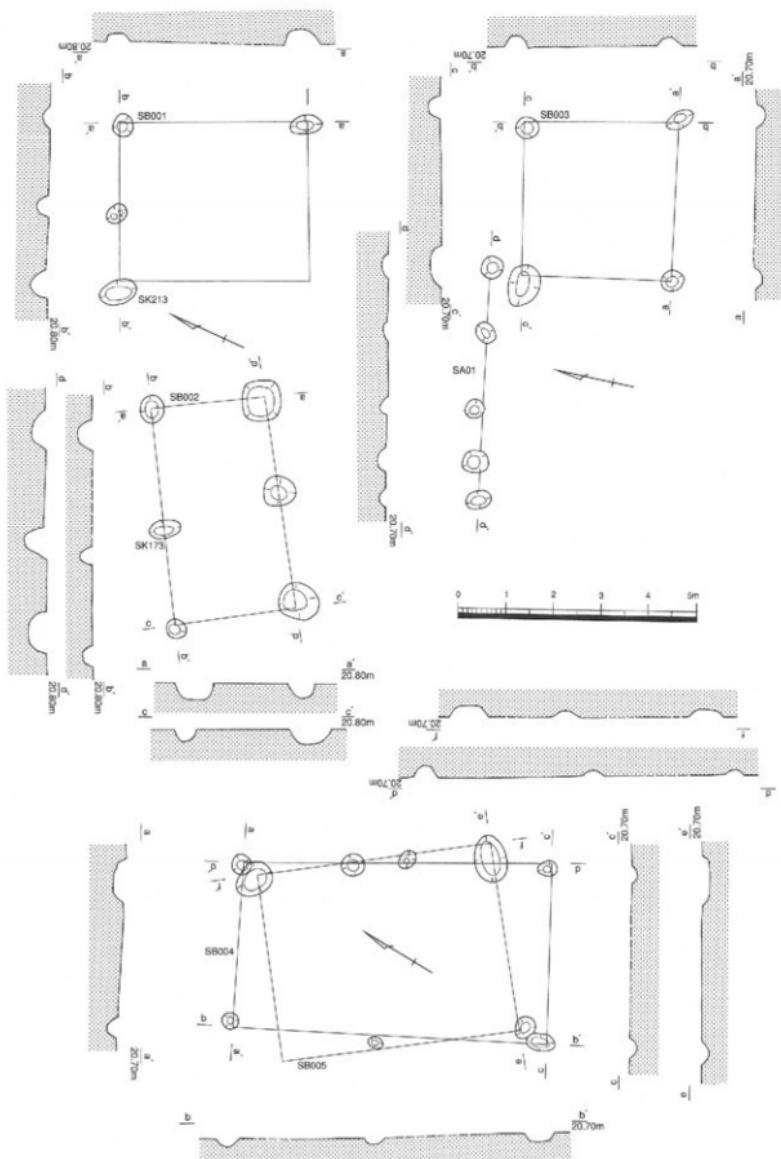


A地区造構全体図 (18)

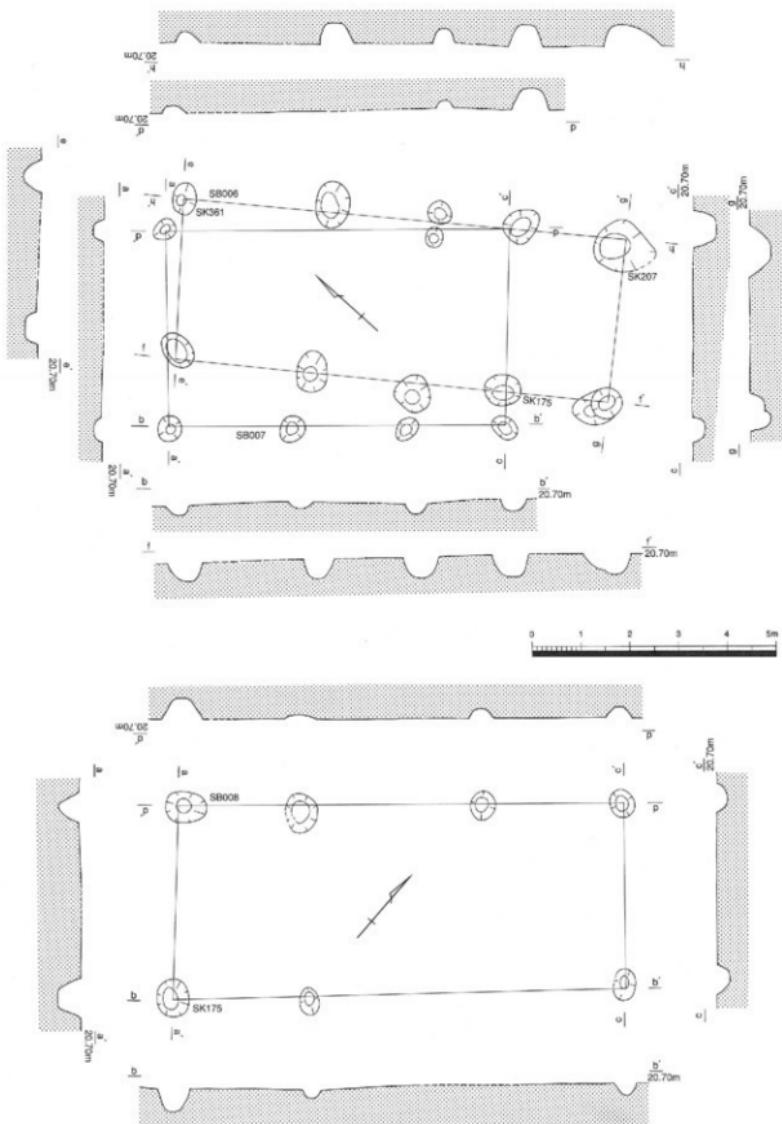


A地区遺構全体図(19)

図面026

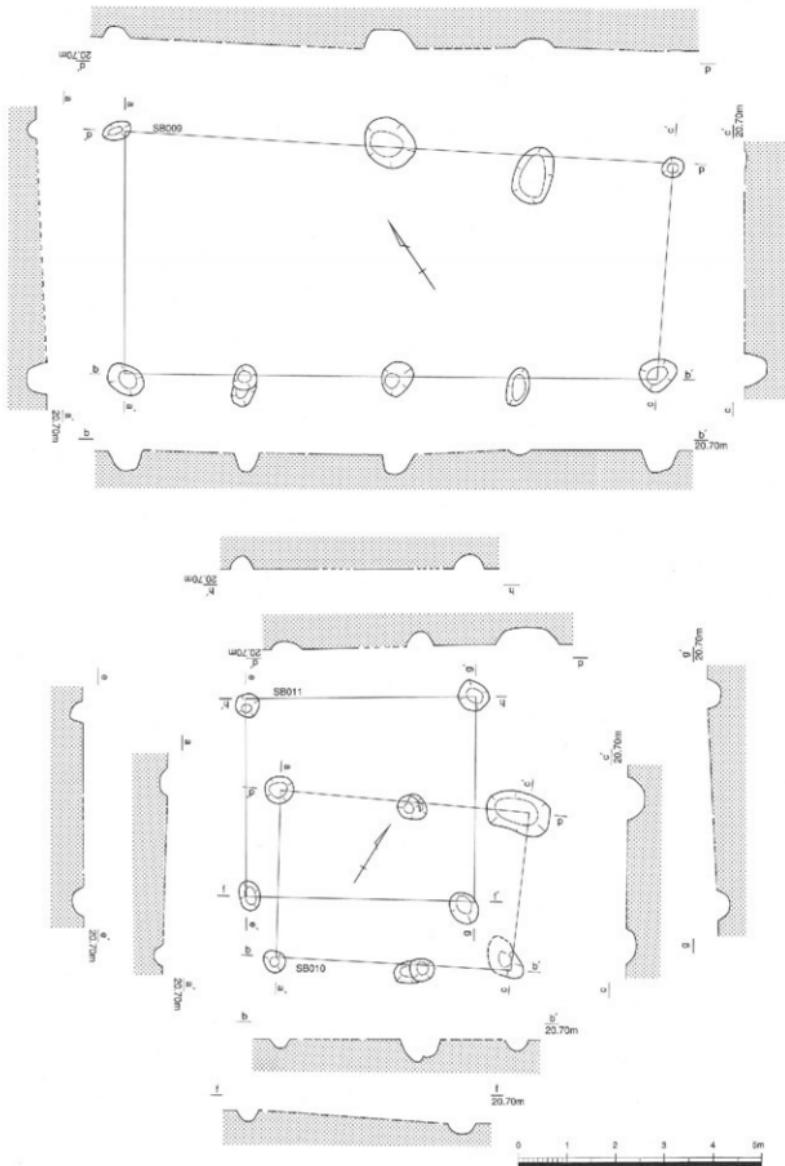


A地区掘立柱建物実測図(1)

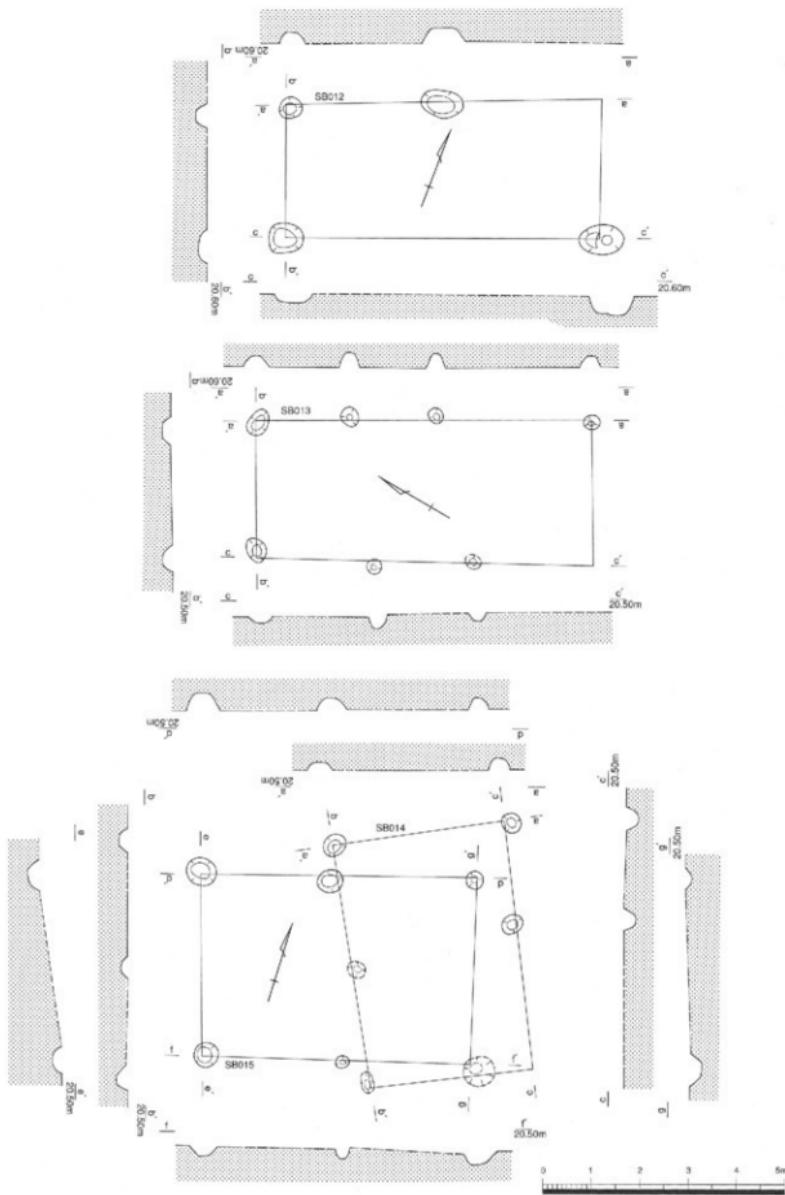


A地区掘立柱建物実測図(2)

図面028

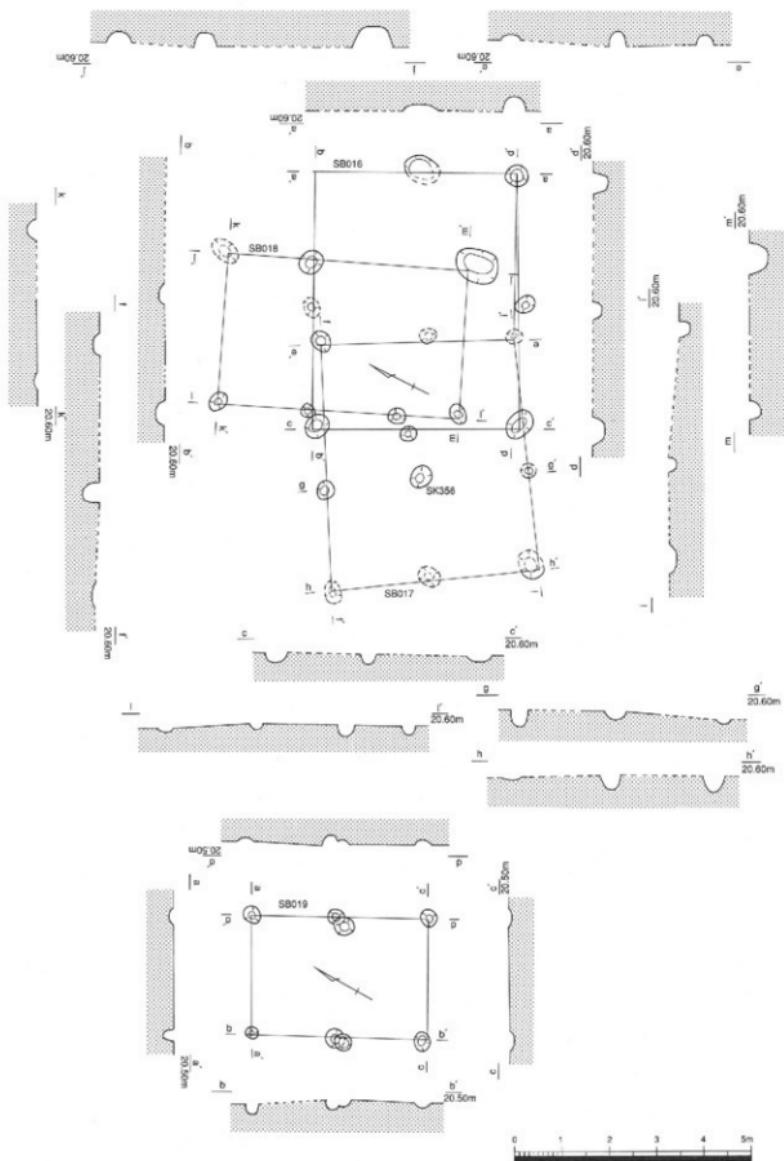


A地区掘立柱建物実測図(3)

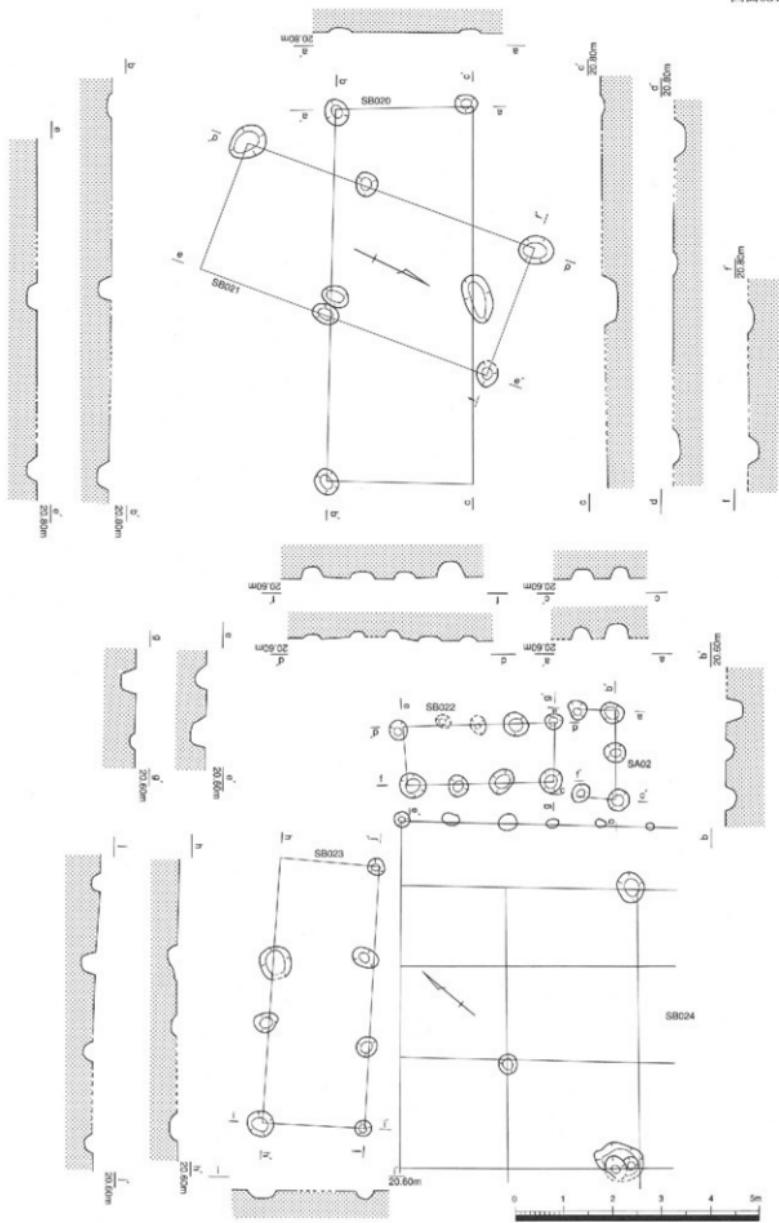


A地区掘立柱建物実測図(4)

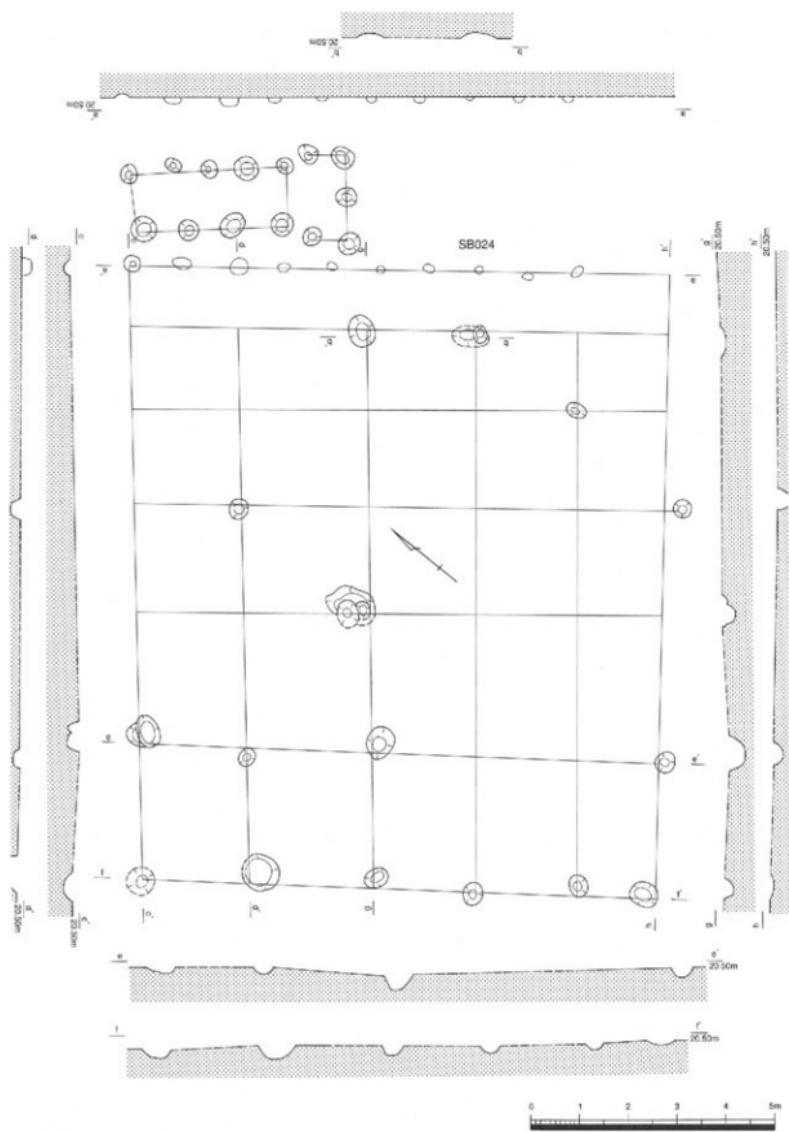
図面030



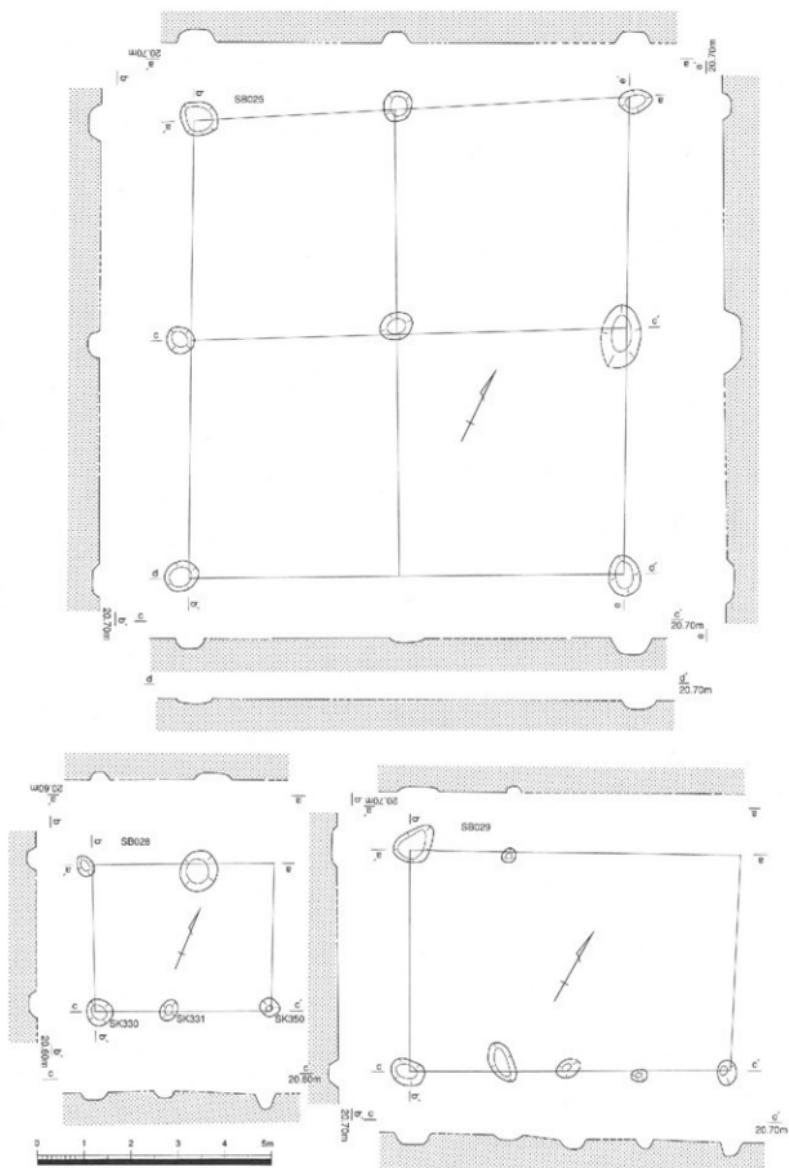
A地区掘立柱建物実測図(5)



A地区掘立柱建物実測図(6)

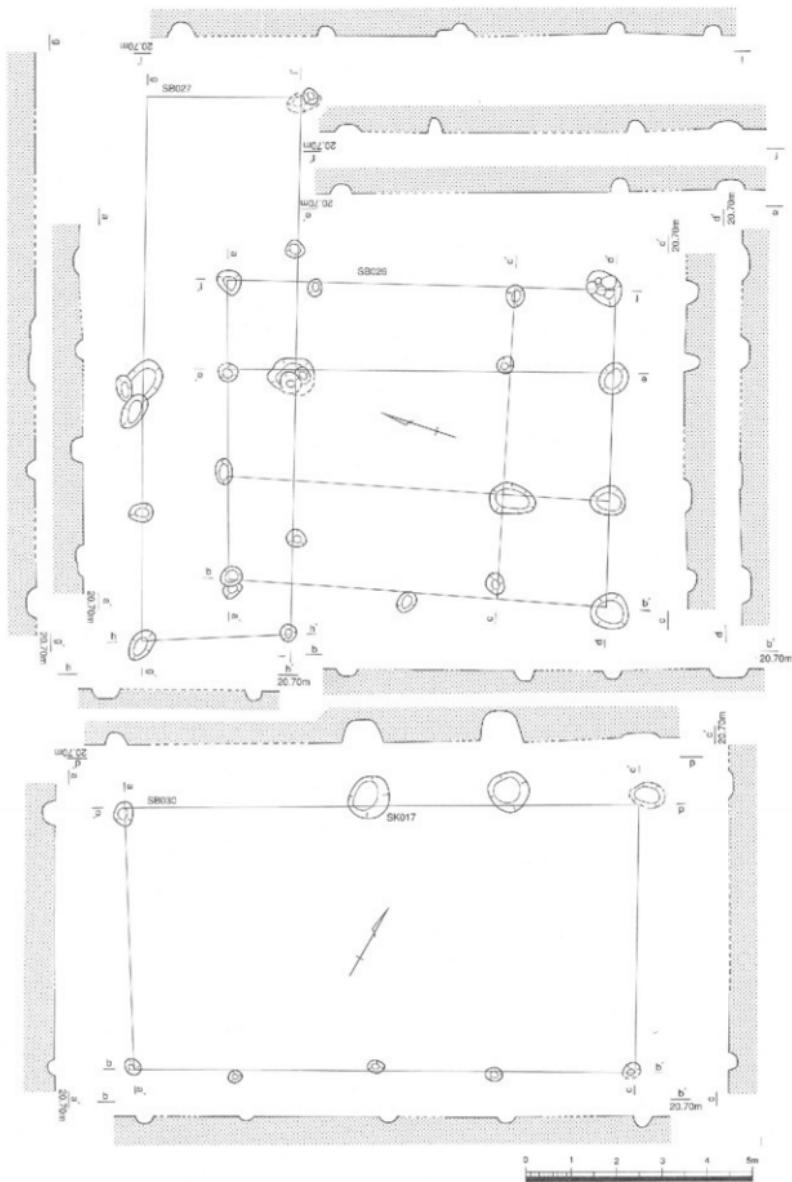


A地区据立柱建物実測図(7)

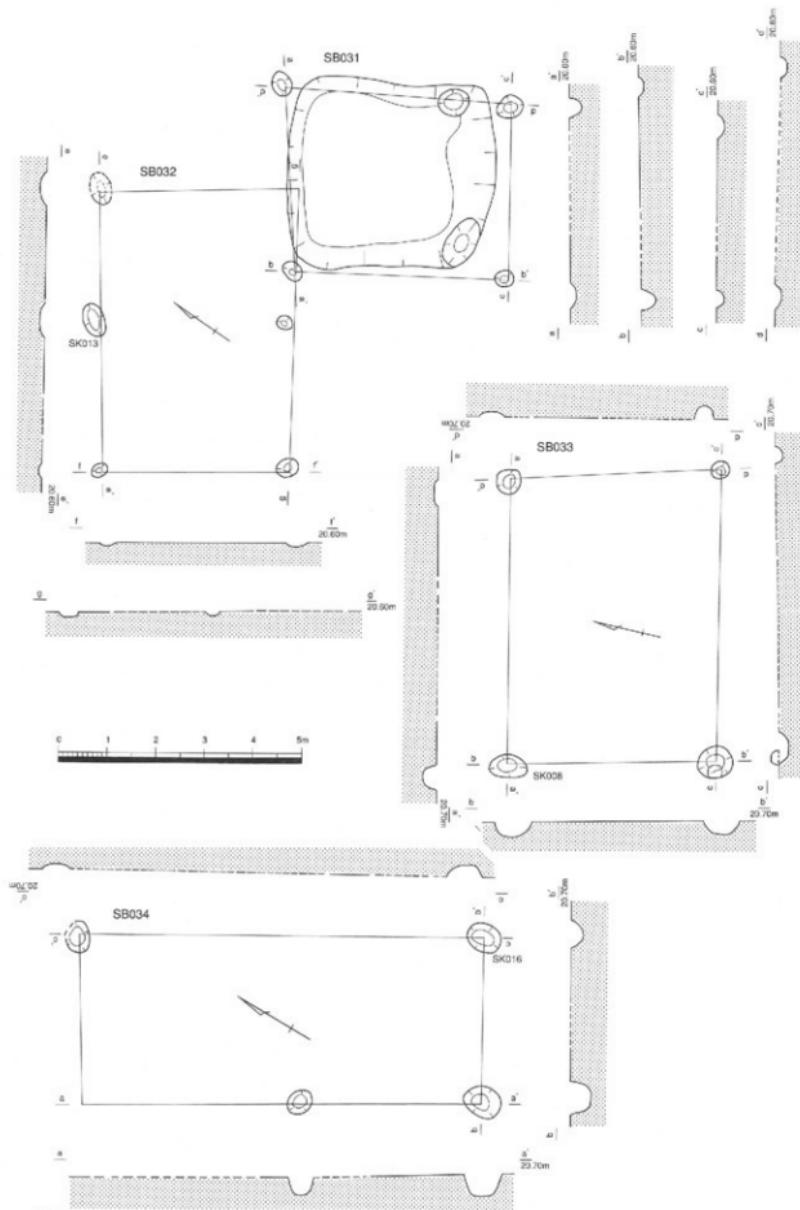


A地区掘立柱建物実測図(8)

図面034

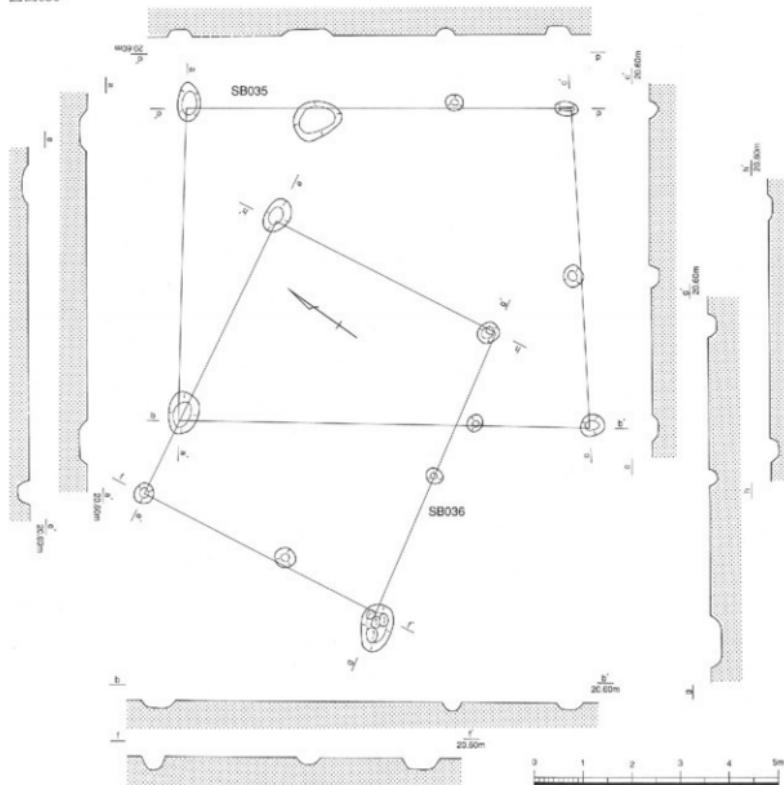


### A地区掘立柱建物実測図(9)

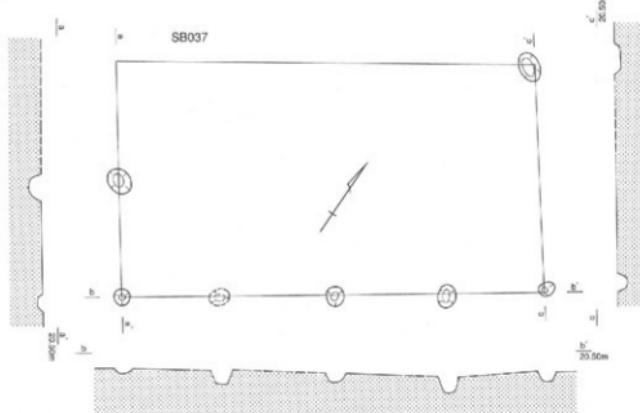


A地区掘立柱建物実測図(10)

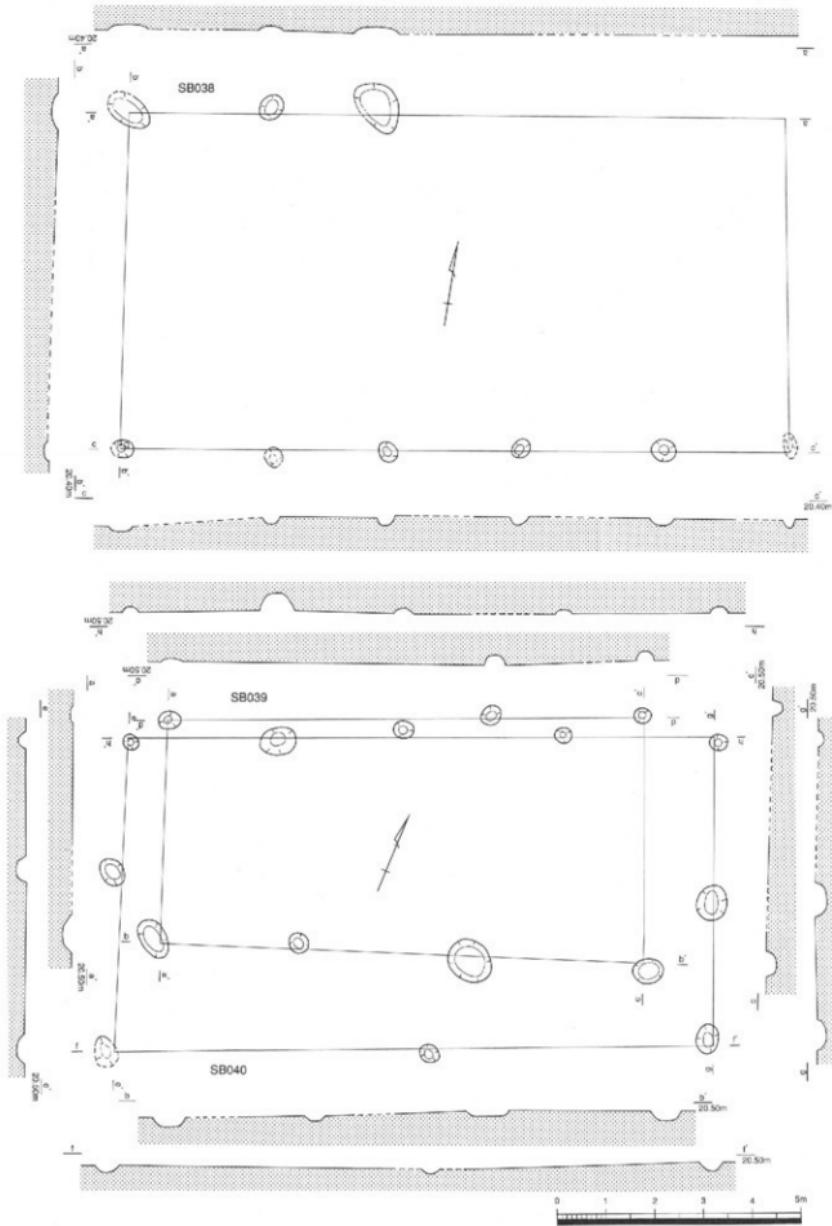
図面036



SB037

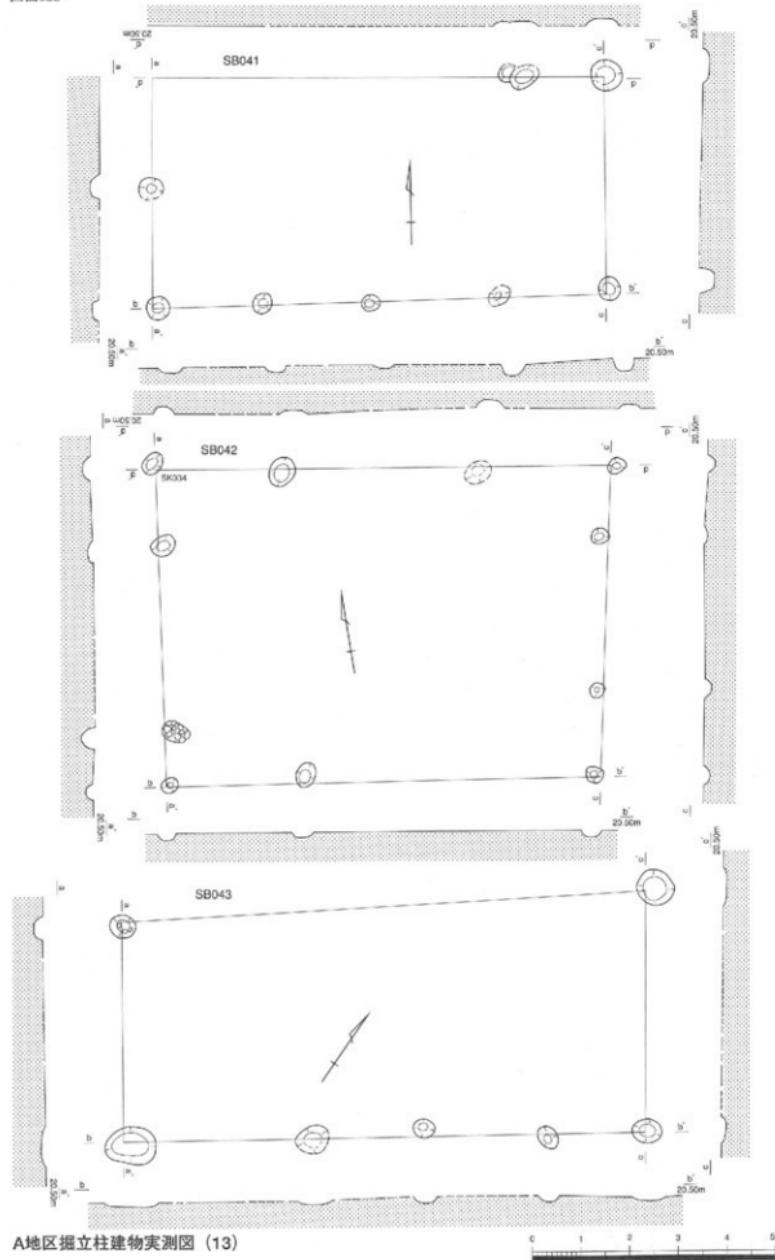


A地区掘立柱建物実測図 (11)

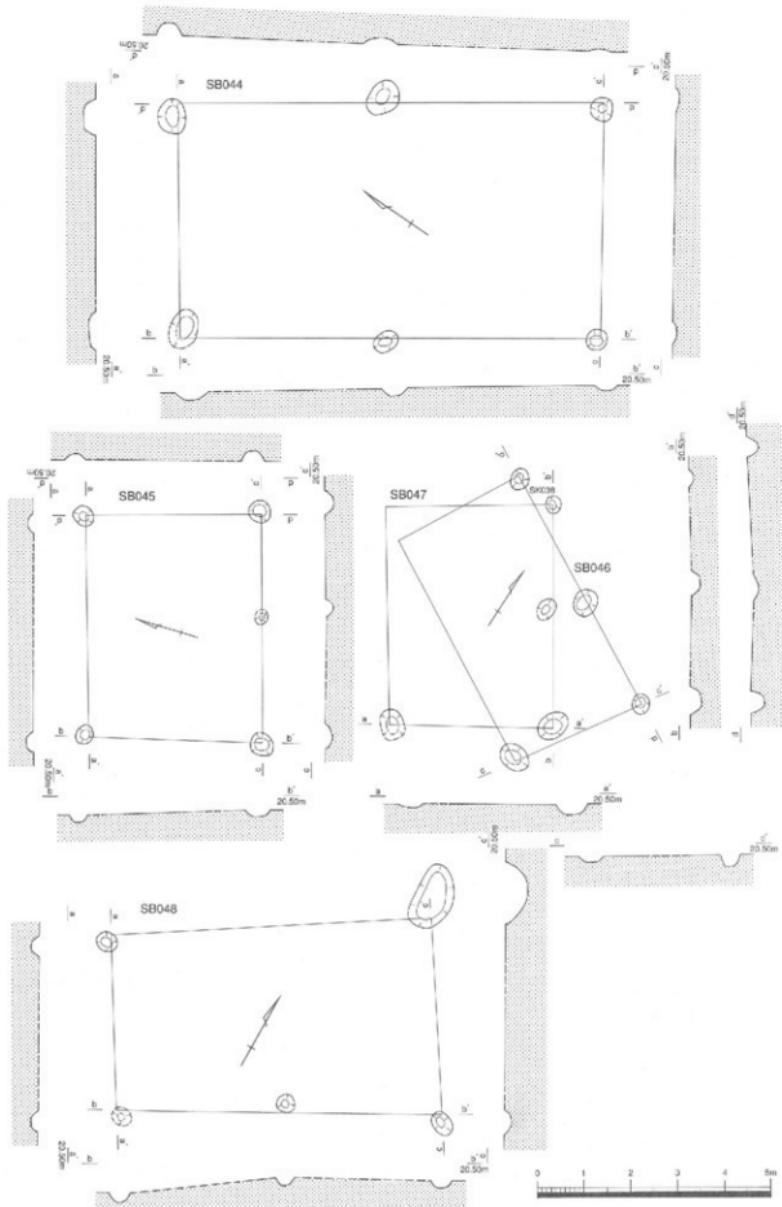


A地区掘立柱建物実測図 (12)

図面038

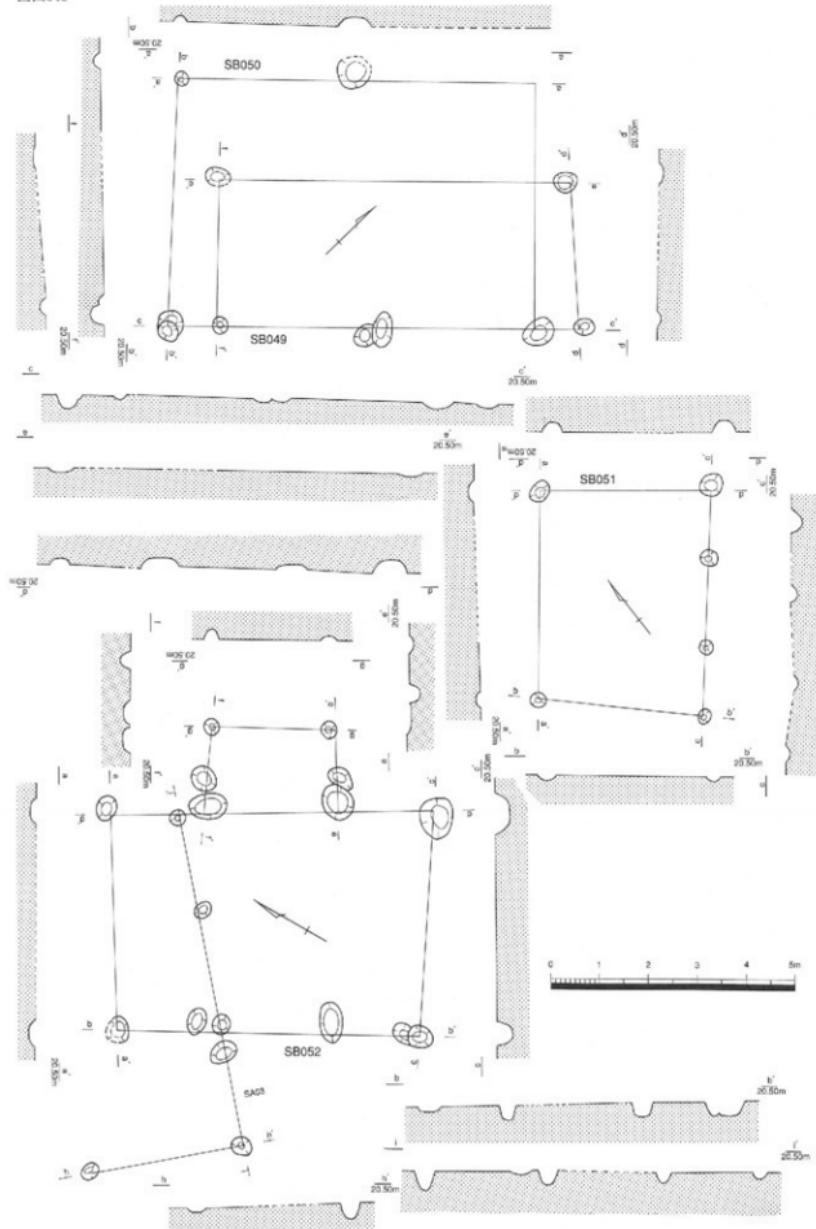


A地区据立柱建物実測図 (13)



A地区掘立柱建物実測図 (14)

図面040



A地区掘立柱建物実測図 (15)